川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-linon

The Senryu Zasshi

No.326

七月號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿九年七月一日発行第九卷第七號
（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年通卷・三百廿六号

七月号目次

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
川柳に詠まれた水のいろ〳〵……路郎・葭乃・汲食子・春巣・摩天郎（八）
楽しんで自由に作ること……麻生路郎（三）
石曾野先生行狀記……堀口塊人（三）
句をめぐる先生と私……八木摩天郎（三六）
人間横丁（XV）……東野大八（三）
川柳と自由律詩に対する私見……川端柳風（四）
新川柳鑑賞……麻生路郎（一〇）
猫礼讃……麻生梨里（一八）
平維盛……富士野鞍馬（二四）
折々小感……日置文郎（三五）
川柳第二教室……戸田古方（三六）
★
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選（一四）
川柳塔……麻生路郎選（四）
同舟近詠……諸家（一三）
一路集「二十才代」「ヒステリー」……土井文蝶選 黒川紫香選（三三）
各地柳壇……（二八）
柳界展望……（三三）
不朽洞会から……（三四）
公私雑記……（三四）

川雑 川柳まつり

本社主催の川雑川柳まつりを左記プロによつて賑々しく開催いたします。日々をいそがしくしていられる方々も、せめて此の大会に顔出しをして、健康と作句に親しむ時間の持てることを欣び合おうではありませんか。柳友を誘い合せて御出席下さい。お待ちしています。

★日時　七月十日（土）午後五時

★会場　於大覚寺（光明寺北隣）
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）

司会者　戸田古方

挨拶　武部香林

祝辞　福田山雨楼

講演　川雑川柳とつりに就いて　中島生々庵

特別課題「誕生」（特別課題の出句は句会出席者に限る）　麻生路郎選

兼題「伜」（三句）「パンガロー」（三句）　麻生路郎選
「毒味」（三句）　中島生々庵選
「湯上り」（三句）　橋本緑雨選

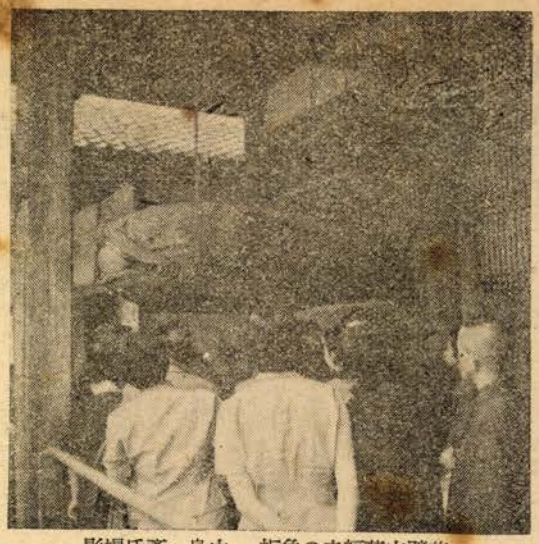
柳話　市場汲食子選

呈賞　麻生路郎

★兼題天位★路郎選天位に不朽洞賞★特別課題優勝者に路郎賞を贈呈★優勝者所属の会に優勝楯を贈る（優勝楯は明年七月返還・川雑支部・準支部に属しない作家が優勝された場合は川雑本社の獲得となる）

会費　七十円（参加者全部にお土産を進呈）

参加の会（大阪府大阪市）
川雑本社・川雑阿倍野・川雑梅田・川雑淀川・川雑桜島・川雑池田・川雑堺・川雑玉造・川雑浜寺病院・川雑西成・川雑大鉄局・川雑天王寺局・川雑島之内・鳥ケ辻・杏林・南海電鉄・白鷺会・帝化・みをつくし・交通局・交助会



黄檗山萬福寺の魚板　中島一彦氏撮影

樂しんで自由に作ること

麻生路郎

京都の妙法院門跡で開催された文人展を、六月六日の日曜に見せてもらつた。

○

文人画を観て愉快に感じたことは、誰も彼もが楽しんで描いていると云うことであつた。

巧拙は別として楽しんで描くと云うことは大変いいことだと思つた。

○

楽しんで描いている点ではおんなじだが描きあげた画の上には二様の態度が表われているように思われた。

○

それは先生のお手本を非常に忠実に摸写されたのであろうと思われるのと、も一つは先生のお手本の摸写には違いないが、すこぶる大胆に、筆を運んでいるように思えるのとの二様である。

○

前者は先生のお手本に、よく似ているのであろう。所謂画らしい画にはなつているが線の弱さが、際立つて眼につくことである。アマチュアとしてやむを得ないことであろうが、これは力の不足である。

○

後者は先生のお手本とはだいぶに形の上でのズレがあるのではないかと思われるが、大胆な筆の運び方から見て前者よりも、線の強さが感じられ、個性らしいものが頭を出していてアマチュアでなければ描けない絵としての面白さがあつた。尤もこうした感想は文人展に対してホントに大まかな云い方にすぎないのであつてなか〳〵すぐれた手腕を見せている作家もあつた。

○

ここで私は川柳のことに言及しよう。川柳の作家の作品に対してもこの文人画と同じことが云えるように思われるからである。

○

川柳とは斯んなものであると云う、或る型にあて嵌めて作句している作家の作品には巧拙は別として、文人画で先生のお手本を忠実に摸写している作家と大して違わないと思う。

○

アマチュアにはアマチュアの世界がある筈である。徒らに川柳の概念に囚われないで、自由に、大胆に、個性を生かした作品を創つた方が、作家も愉快ではないかと思う。

先生のお手本と形の上で多少のズレがあつても、自由に、大胆に筆を運んだ絵の方に、アマチュアらしくて好感が持てるとしたら、川柳も亦そうだと云えないことはないでしょう。イヤそうあつて欲しいと思う。そこにこそ真に川柳することの大きな欣びがあるのだと思う。

○

文人展を觀て（戯作）

文人展会場のよさほめられる
文人展最上級でほめてほめておき
文人展ひよろ〳〵とした滝の線
文人展表装代で値踏みされ
文人展あの小娘にひけをとり
文人展来年も亦出す気なり
文人展よい御趣味でと申しとき
文人展これもつきあいですと云う
文人展かたの如くに謙遜し
文人展帰りにどッか奢らされ

川柳塔

ホノル、市内藤草一郎

困らない遺産貞女に仕立上げ
欲しいもの喰わせと医者のむごいこと
添うてから塗るより芸がないと知り
にこりともせずに置き酌ぐ婆芸者
本能は云わず主への化粧です
新刊書電球を替え眼鏡替え

米子市　三鴨美笑

長椅子で待たされ長くなれもせず
酒飲まぬとこを女房はうれしがり
けちくさい男で腕に金時計
映画まで母のつき添うのを嫌い
欺されたことを女は悔いてなし
誰の子かなどと田舎はせますぎる
酔うてから寄つてみる気のとこがあり
金利にもならぬ話を父はさけ
セパートに引つぱられている社長の子

大阪市　須崎豆秋

吉田さん三振しても引つ込ます
用心をしながら食べる初鰹
漬職が何時の間にやら無罪なり
パチンコの症状顔が歪んでる

大阪市　正本水客

ラケットを持てば女の線になり
セロハンに包んだ胡瓜つまんでみ
遮断機の向うは苺持つた妻
電報をすかしてみても始まらず
悪魔の声つて優しいのね神さま
強気々々で通し四十で死にやはつた

池田市　黒川紫香

停電へ猫思いきり踏まれたり
任地にもパチンコがある便り来る
子を連れた同志ラムネを立呑みし
魚を釣る脊中で蜻蛉とりそこね
待呆けの手にキヤバレーのビラを吳れ
二代目も養子で無事な暮しむき

大阪市　丸尾潮花

源氏でも平家でもよし金とならず
やけくその酒とは女つゆしらず
言葉では堅い貞操論を吐き
恋のない箸にぎやかに喰べ終り
銀行のマッチで女つけてくれ

稲葉鵜花婚礼

山陰へ行くと新婚仲がよし

大阪市　北川春巣

私鉄ストの連休せめて風呂へ行こ
六年生大工まがいの音もさせ
小ぼんちやんと呼ばれ三男負け嫌い
退院は家の天井の低さ言う

母の日

洗濯を休めと母へ雨が降り

岡山県　浜田久米雄

血圧の話がわかる年になり
髪の分け方が晩まで気にかゝり
安普譜貯金の高をたしかめる
宣傳車なにかぴいぴいとおり過ぎ

大阪市　武部香林

夕櫻鞄を提げて通りぬけ
親切の押賣りをしてくたびれた
パチンコでパチンコでと手際のよい土産

池田市　戸田古方

いそがしうなつて篆隷楷行草
力点支点何だ鋏の話かい
通がつているのが竹のパイプです
金のない方は政権ようとらず
いづくへ行く列車か旅がしてみたし
お城下らしい本もならんで古本屋

尼崎市　水谷鮎美

はるのみづうみみづうみのはるの月
空つぽの財布請求書がのこり

大阪市　西尾栞

行末を案じる顔を蔑まれ
通ぶつたお客に板場の苦笑い

大阪市　市場沒食子

似顔絵もやつぱり老けたように出来
世渡りが下手で仙人掌などいぢり
役得の酒もビールもほろにがし
君の僕のと五十になつて仲のよさ

横浜市　福田山雨楼

猿の手に細く似て来た眼の玉も
ひとりぼつちになつてもままよ生きぬこう
何事も三猿主義で通したし
病重ければひたすらに生きたし

じやじやむじやにしてから女寄りつかず
退廳時刻迫り書類は矢の如し
天井が高く煙草が欲しくなり
出雲市　尼　綠之助

葉櫻の溫泉に慰安会まだ続き
呑み拔いた便り頼りの子から来る
豪快にこきおろされる車中談
吹田市　野本呑水

母ちやんに聽け〳〵宿題逃げるなり
尼崎市　小林文月

勤務とてガールフレンド行てしまい
家事の都合とかで彼女は辞めました
福岡市　山根白星

税務署が来ているらしい電話なり
字と言えば字になる郵便局のペン
我が胸の洗濯板に似てあわれ
大阪市　渡辺孫拙

奴さん二度目の話ちと違い
まちぼけの友の分までくてしまい
泣きながら別れたばかりに又いろけ
大阪市　富岡淡舟

四十すぎの夫婦白髪を拔き合つて
嘘でもよい孝行がしてほしい母
閑谷にて

遠来の客へ鶯谷渡り
奈良県　飯降白香

人恋し夜はやたらに本をよみ
食いたりて今宵は思う事もなく
宇部市　長野井蛙

一年生習つた歌で帰つてき
パチンコのこゝにも人的資源(ひと)あり余り
栄轉という名で一線から追われ
岡山県　丸山弓削平

柿の葉の美しさに今日驚きぬ
居眠つていなかつたと妻言い張りぬ
酒が俺の口からドラ声を出さした
理想家を嗤うた君が何をした
大往生とは弟子達の作り事
床に一茶の軸と猟銃と
小菅からゴリラの様に社長出る
俺の税金で君の恩給
岡山県　直原七面山

失恋の果ての無口と母知らず
教養の違いを言うて娘に蹴られ
嫁きたけりや嫁けと男は震えてい
人の目へ男の方が手を放し
桐の葉の散りゆく如く失恋し
倦怠期らしく洗濯物の山
住所聞けば橋の下よと嘯く娘
ドブロクの良さを説いてゝ署長なり
釣り舟の中で出来てる整理案
二等車の心地も知らず父は逝き
四十二で初婚ですのとすましてい
山火事へ鳴る〳〵修導院の鐘
出雲大社にて

神木も火事には勝てぬものらしく
貧乏は無駄な愛想を言うとれず
大阪市　西森花村

團子運轉序列正しく亦続き
不愛想な守衛のように仁王さん
画きたての油絵に似た顔でくる
鳥取市　河村日満

種切れもなく一日を妻と居て
病人も寢て居れぬほど雨が漏り
二代目は刺される程の才でなし
労働歌重役室の窓閉まる
東京都　藤本満年

颯爽と街の風切る乳房かな
靴をぬぐ脊中に今の地位も知れ
ゴルフ燒け少しは男らしくなり
祇園の灯舞妓さら〳〵サインする
宿毛市　姫田夕鐘

里十九氏を偲ぶ
怒りつぽい里十九であつて若かりし
素人浄瑠璃初舞台

心臓で一ケ月目に太閤記
持ち逃げも千万円の桁となり
岡山県　福島鉄兒

撰りによつて貧乏筋へ生れて来
親譲りですと禿げたを笑つてい
枚方市　塩浜一路

細くとも達者であつた日を思い
療養者みんな見ている日本晴
何々の物知りそろう療養所
人生の中休みとは思いしが
大阪市　西いわを

別れても主人々々と口へ出る
夫婦では無いさ話のはずみよう
岡山県　横部牛歩

身から出た錆と言われる過去があり

出発へ妻の注意は酒のこと
闘病が雀の窓を淋しく見
水道がついて寝轉ぶ暇が出来
朝帰り髭のあるのを忘れとり
岡山市　服部十九平

商魂は元宮様を顧問にし
簡單に破れる恋に熱中し
金がないからとあつさり割切つて
小つぽけな兄イでボスの夢を持ち
岡山県　大森娯句樂

お炙もう慢性と云う顔ですえ
女湯の暖簾大きな尻へ揺れ
乘越の証明が要る春の汽車
高知市　大西迷窓

交換手彼氏の声に似たをきゝ
ほろ酔えば十九を口説き度くもなり
下関市　阪田良坊

目当とは知らず保険へ後家をたて
下関市　石川侃流洞

うれしい日父は明治の唄を出し
木の芽して我が家に幸が来るような
社の景気受付までが反り返り
大阪市　安岡珊枝郎

郊外はストも考慮に入れて住み
広島県　山田季贊

縁談を断る裏に彼女あり
卒業を待つてましたと美容院
合併へそれから市営バスが着く
スト決行安芸の車内で聞かされる
大阪市　山本葉光

飲めぬのも合唱をする黒田節
血圧を気にする社長とは見せず
倉敷市　木村千容

祝辞にもちよつぴり自己を宣傳し
三人の孫へおかきが焼き切れず
同門の血が血にいどむ名人位
パチンコの悲劇が身近にせまつて来
母の年忘れましたと不肖の子
倉敷市　田垣方大

足を組む女給総理をこきおろし
披露宴に総理も来てたのに離婚
石川県　那谷光郎

育兒法の本を並べて子を死なし
味の素どつさり入れて父炊事
当てはずれ集金先の名がかわり
妻の瞳がそれから光る温泉のマッチ
石川県　野村味平

長生のうたてがられて負けて居ず
トロッコの線路が延びる新市街
胃のことにこだわつてからいけるロ
大阪市　木村水堂

固まつた頃にガス屋が掘り返し
うちの子も混つて畠踏みあらし
姑に好かれ夫を尻に敷き
金づまりお稲荷さんもほつとかれ
まゝごとのような軍備で採めて居り
飲めば酔い酔えば唄つていゝ養子
弟子は師の恩師は弟子の身を案じ
高槻市　福田丁路

エロもよしグロもよしとて千鳥足
何をか云わん敵に落目を労られ
神妙におつちよこちよいが悔み受け
妖気さす花の都の夕まぐれ
倉敷市　水谷谷水

御趣味でも後添えまでの世話はせず
わしらでも未亡人かと笑いこけ
古典的な妾宅もあり問屋町
男のクセに値切ること値切ること
四本目からは妻君顔も見せず
あの女男おそれぬ欠伸した
表彰のどこか寂しい未亡人
やにさがりあれで六十路へ二つとか
ぼうふらを立たせたような内閣だ
今日あるは親が賄賂と知らぬ椅子
従業員手帳で飲んで淋しがり
倉敷市　椙原一善

掃除婦も女なりけり今日はぬり
いざ買うとなればためらう妻なりし
本心はそうであつたか金で切れ
岡山県　田村藤波

大物を漸く魚籠にしたスリル
黄身だけでつなぐ命をいとうしむ
草ぼう〳〵深い事情のある空地
岡山県　岡田夜潮

まだ運が出ぬ易だつた二階借
退職金これでいよ〳〵縁が切れ
明日も亦泣かねばならぬ息子持ち
岡山県　政田大介

イヤリングはずして今日は花を活け
アメションが和服嫌いにして仕舞

茨木市　下山清潮

走ることびりでも中学卒業し
気がつけばはだかのまゝで五十年

岡山県　本田惠二朗

一廻り若く見せたいイヤリング
処女性が何によと言う妓涙ぐみ
恋人にすまぬ見合の帯をしめ

大阪市　眞鍋一瓢

背任へずる〳〵欲めた美しさ
相惚れと見えて女もだらしなく
ブゝ引いた同志南京豆を分け
色眼鏡乘馬ズボンへ風が吹く
嫉く身にもなつて四十の薄化粧

京都市　松川杜的

信号もジグザグ行進には勝てず
ハイヤーで来てパチンコ屋の奥へ消え
パチンコをきつぱり止めてバット族

豊中市　村上ゆづる

女同志主人の麻雀敬遠し
ともかくもタイプを習うことに決め

鳥取市　森本法泉子

酒を飲むことが趣味とは恐しい
首飾この程度なら硝子と見
重役は笑つてならぬ顔でいる
またもとの顔にかえつて車掌行く
喰べるだけ喰べて夜汽車は寢てしまい

倉吉市　日置文郷

同じ門から油の服と高級車
虫よりも花のいのちの尊ばれ
水爆反対署名した手で蚊を殺す

混血兒日本が好きと云う哀れ

大阪市　佐野白水

妻と子が急所をついて来た今宵
病弱は停年の日を待ちかねる
多忙なる父を案じてゐる夕餉

大阪府　小池しげお

こゝをこう切ると整形きめちまい
もう少し叱つてほしい義母といる

倉敷市　松村万古

善人が何にするのか金を借り
親切が過ぎて婆さん嫌がられ
貧乏が理窟に負けぬものを持ち
一年をお茶一杯でねぎらわれ

倉敷市　藤井春日

バスケット提げて出た子に引きとられ
交際と云われ一口に醵金する
宿直はやつときますと如才なし
ペラ〳〵と喋つて院長次を呼び

大阪市　木口賀峰

動くなり幹事ビールを酌ぎ廻り
説明の切れた所は唄になり
一行のカメラに入るバスガール
方言に情緒をみせるバスガイド
上るなり女中幹事をさがしに来
混湯ですかと男うれしがり

一部屋はみんな大阪辯の人
三宗家揃つて能のむつかしさ

岡山県　岡本緑風子

甘党のする相談は高が知れ
ライバルを轉勤させる判を押し

岡山市　津田麦太楼

燈明をあげる鰥夫の手の薄さ
六十のほんとの恋を笑われた
印税がはいる女房の冷たかり
スナップ屋はアプレ娘を見のがさず

米子市　小西雄々

浪曲の範囲で佐渡を知つている
速球でとにかくプロの飯を喰い

堺市　高崎雄声

十八がもう一度欲しい老車掌
守衛元荒鷲のひげをもみ
停年も近づき世辞がうまくなり

西大寺市　三枝一策

カーテンを信じ女の大胆な
飲代を貯金したらと妻の説
何はなくとも飯櫃が無事に空き

大阪市　吾郷玲人

色街の風呂でゆうべの客のこと
方角を気にして老婆病み続け
大阪は怖いよ有料トイレット

大阪市　若本多久志

倖は話せば解る父を持ち
指定席男一人は俺だけか
日曜の朝はあいにく眠くなし

岡山県　小原宇柳

横顔の自信默つて撮らしとり
三等はあちらと顎で教えられ
若人が好きだと隠居話せる気
菩提寺の留守の扉が押せば開き
恋人の頃の暦をもう見せず

川柳に詠まれた

水のいろく

麻生路郎　麻生葭乃
市場没食子　北川春巣
司会　八木摩天郎

摩天郎＝今晩は川柳を通して、水に就て色々な御話を伺いたいと思います。水と云うものは、空気と一緒で、人間とは、切つても切れぬものでありますが、平素は案外その有難味を忘れて暮して居るものです。水が無いと非常に困つて、水を買つたりしますが、水害のように、あり過ぎても困る事があります。色々の面に、水がその力を発揮していますが、句に依つてお話を伺いたいと思います。先ず化学的な方面から、春巣さんに……。

春巣＝イヤ、それは汲食子さんに——。

没食子＝デワ、私からはじめましよう。水は無色透明、無味、無臭でありますが、地層の関係で一概にそうではありません。化学的な構成は水素の二原子と酸素の一原子の結合物であります。その化学記号は H_2O であります。然し必ずしも H_2O の場合はなく水に溶解するものを含んでいます。その夾雑物としてクロールは普通よく知られていますし、その外、アンモニア、亜硝酸、硝酸、炭酸、硫化水素、砒素、重金属等が含まれ、そのうちアンモニアや砒素は飲料不適の絶体対照です。医薬の方では、常水と云つて、普通の水も使いますが、注射薬や、腐敗し易い薬、化学試験に使う薬は、蒸溜水を、使います。

路郎＝蒸溜水といえば、没食子君の句に

蒸溜水のような女にこびられる

と云うのがあつたネ。蒸溜水は、非常に役立つ水であるが、味も艶も無い水なので、此の句が生れたのだと思う。この句の面白さは比喩の奇抜さにある。

没食子＝蒸溜水ばかり飲んでいると、反つて身体に、悪いと聞いた事があるので、そう云う意味を、含ませて作句しました。

葭乃＝話がすこし横へ外れますが、歯医者が虫歯の研究で、虫歯のある人を調査された時、或地方では、かなり、甘いもの好きの人でも、少しも虫歯が無いので、調べたところ、その地方の水に、弗素が溶けていたそうです。その弗素と云うのは、酸を中和する力を、持つているのでしようか。

春巣＝サア、それは、目下研究中と違いますか。

路郎＝内閣みたいな事を、言うねえ。（笑声）

春巣＝併し、その事実は、数年前から、やかましく言われて居りまして、水道の中へも、その弗素を入れようかと云われて居ります。或はもう入つて居るところが、あるかも知れません。

路郎＝僕は出来るだけ、夾雑物の有る水が好きです。恐らく酔いざめの水でも、或はハイキングで飲む山水でも、水道の水や、蒸溜水のそれとくらべて味が、雲泥の相違であります。人生に就いても、そんな事が言えるのでは無いかと思います。若し、人生が、蒸溜水のような純なものとしたら、我等の愛好する川柳が、生れ無いかも知れないし、若し、生れたとしても、味気無いものと考えられます。仮に、加茂川の水で産湯を使つたんだと云うても、面白味は全く無くなるからです。産湯と云えば、渡辺暁童君の句に、

産婆悠々湯てす水てす

と云う句がありますが、凡て水と云うものが蒸溜水であつたら、こんな句は、生れないでしよう。

春巣＝酔いざめの水は、寒中が一番美味しいと言う事を、聞いた事があるのですが、これは今の夾雑物と、何か関係が無いのでしようか没食子さん……（没食子氏にかわつて）

路郎＝夾雑物は勿論、関係があります。同じ寒中でも、水道の水と井戸の水と、矢張り違います。私の句に、

酔うて来て既に零時を過ぎた水

と云うのが、有りますが、これは酔いざめの水の、うまさを詠んだものです。寒中のが、美味しいと云うのは、冷めたさにあります。なまぬるい酔いざめの水なんて、凡そ想像も出来ません。

春巣＝夾雑物の話で、弗素と、よく似た元素で沃素と云う元素の含まれておらない水を、飲むとクレチン病と云う脊が伸びない小人の病気が起つて来ます。これも或地方の飲み水から来るらしいです。

摩天郎＝今日の座談会は、私にとつて非常に有益です。もつと早く脊の伸びない話を知つてたら、こう脊が伸びなかつたでしよう。

葭乃＝もう手遅れですよ（大笑）

摩天郎＝それでは、酔いざめの水をつゞけて下さい。

没食子＝良子さんの句に、

酔ひざめの水用意する妻となり

と云うのがあります。太田良子さんその儘のお姿の句です。

路郎＝それから水に、硬水と軟水がありますね。飲むのには、硬水でも軟水でも違わないでしようが、化粧には、硬水と、軟水とは違つて来ますね。

没食子＝水には硬度と云うものがその種類に総硬度、永久硬度、一時硬度との三つに区別されています。水を煮沸すると、この一時硬度は消えてなくなり永久硬度が残ります。この両者を合したのが総

硬度です。石鹸の泡立ちが悪いと云うのはこの硬度に関係します。

摩天郎＝化学的方面は、それ位にしときまして、水に関係のある子供を詠んだ句について、お話を伺いましよう。

路郎＝私の面白いと思つたのは、

腕力の順に子供は水を飲み
（桑　南）

と云う句です。私の腕白時代を、思い起させて呉れる句で、その場の状景が髣髴として、目に迫つて来ます。北京の奥の方へ行つた時の事ですが、非常に綺麗な水が流れていましたが飲んだらいけないと云うことでした。

沒食子＝それは何んでしようか。

霞乃＝下痢をするのだそうです。

春巣＝細菌が居るのと違いますか。

路郎＝そうかも知れない、あちらでは湯を売りに来ますからね。戦争の句で、宵明君の句に、

日本の水が一杯だけの戻

と云うのがあります。戦争当時の泥水や黄色い水や、死骸の浮いた水溜の水等さえ、飲んだ日本の兵隊のほんとの叫びだと思います。没食子さんなどはその感が深いだろうと思います。

沒食子＝その頃の僕の句に、

落伍即死なり頼むは水と足

と云うのがありますが、水には実際弱りました。蛭の卵の水を、飲んで下痢した事があります。実際日本を離れて、みると、水の有難みを、つくづく感じます。

路郎＝それから水を見て、溜息をついている様な人もありますが、その例句としては、家沢斉花君の句に、

行く先のある川水のうらやましし

と云うのがありますが、句の裏を考えると、しみじみとしたものを、感じさせられます。

春巣＝平素は、水の存在が、忘れられて、いますが水が句になるのは、何か大事件があつた時では無いでしようか。

路郎＝そう云うことも云えますね。しかし、大事件と云う程ではなくとも、服部十九平君の句に、

水一滴フライパンに落ちた慌てよう

と云うような句もあります。これなどは、なんでも無い出来事には違いないが確に、つかんでいると思います。

春巣＝蘇堂氏の句に、

金魚鉢給仕井戸水もろて来い

と云うのがありますが、これは水道の水には、消毒薬クロールカルキが入つて居つて、人間には無害ですが、金魚だとその為に死んでしまうのです。それで井戸水を使うと云うところです。水道の水なら汲んで、半日程置いてそれから入れるとよろしい。水道の水が、味が悪いという原因も、先程の混り気が無いと云う以外に、終戦後は、このクロールカルキが、大分原因していると思います。

井戸水をほめて先輩客になり
（淑　郎）

と云うのもあります。

沒食子＝ひと頃の、水道の水を飲むと、それをよく舌に感じました。摩天郎さんの句に

水にさえ金が要るかと里の母

がありますね。

摩天郎＝田舎の母なんかは、水に金が要るなどとは思いません。水はタダのように、思つています。

路郎＝その昔、萩の茶屋時代に、水を一荷三銭で毎日買つたことがあつたね。

霞乃＝そうでしたなア。

摩天郎＝大和川の水が涸れると、堺では大阪の水を購うて、淀川の水を飲んだ事があります。

沒食子＝金魚の話の序ですが、放射能の雨で、郡山の金魚が、死ぬそうです。

路郎＝厄介なことになつたもんだなア。梅里君の句に、

客あしがとぎれぜんざい水をさし

と云うのがあるが、一寸面白い句だと思う。関東煮でも、ぜんざいでも、商売人に言わせれば、アレはたゞの水では無いように云うが、たしかに水道の水をさしているのを見たことがある。「客足がとぎれ」が面白いじやないか。たゞの水でなけりやア、客足がとぎれなくてもさせる訳だからな。

春巣＝たゞ今、ぜんざい屋で、水が金になる様な句が出ましたが、（没食子氏をかえり見て）薬局の方は、没食子さんの畑ですが、水を売つている様な、句がありますね。阪大川柳会の頃の、尾崎方正先生の句に、

水道の音て調剤終りたり

と云うのがありましたが、この句は面白いと思います。

沒食子＝薬局で、水を入れている所などは、患者に見せるものではありませんね。大部分は、水であります。患者にして見れば、適量と云う事を知りませんからね。

摩天郎＝それでは、次に詩情の流れた句に就いてお話を願います。

路郎＝そうだネ。石竹君の句に、

水やれば茄子こちら向くてかてかと

と云うのがある。それから、

へちまもう水をとられる風と知り
（霞乃）

どこへ行く水か鄙閑の色をのせ
（潮　花）

と云うのはどうかネ。

霞乃＝水やればの句は、情景をうまくキヤツチしていますネ。感じが出てますネ。

沒食子＝そうですネ。

霞乃＝わたしのへちまの句が出来たのは、秋でしたが、凋つて瓶にさしましたが、あまり水は溜りませんでした。

路郎＝私たちの阪神時代のことだつたネ。

春巣＝水をとるのにへちまの根と反対にさした人がありました。（大笑）

霞乃＝へちまの水は、薬と化粧用に、使いますね。

沒食子＝へちまの水は氷砂糖を入れて、咳止めになります。化粧下としてペルツ水を、こしらえるのに、水の代りに、へちまの水を使

OSK
毛織物
既製服
製造卸商
株式会社
大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二
電話東(94)一七四五番

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五六〕

税務署と言えばシャツクリ止まつたり　（栞）

税務署が来たと聞かされただけでシャックリが止まつたと云うのである。常に税務署におびやかされている連中にとつてはマジナイよりもよく利いたかも知れない。笑えない滑稽である。

〔五七〕

大阪だ月賦のラヂオが鳴り出した　（清潮）

朝ッぱらからジャン〳〵ラヂオが鳴り出すのも大阪である。五球のスーパーですと云う、そのラヂオも、その実月賦の品で、まだ半分も拂えていないのである。「アラわたしとこのラヂオも月賦なの」とも何とも云わないが、流石に大阪、向い三軒両隣りから鳴り出すのである。

〔五八〕

刑事より鋭い妻の御眼カ　（満年）

ワイシャツについている口紅から夫の今日の行先を判断するぐらいはヘッチャラに違いない。この句は妻の眼力におそれ入つている人を詠んだもの、同感の夫も多いであろう。

〔五九〕

再婚の連れ子義理の子今度の子　（牛歩）

佳人薄命と云う言葉があるが、嫁して間もなく未亡人になる。遺児を抱えて生活戦線に投げ出されたがまだ若いんだしと、再婚をするようにすすめられる。子どもを見て貰えるんだつたら、と再婚する。そこには先妻の子がいる。そこえ今度の夫との間に子が出来る。実にフクザツな家庭が斯くして生れてゆく。佳人は何処までも薄命の道を辿るらしい。

〔六〇〕

縫目あるので素足ではないらしい　（方大）

オヤ裸足のまゝで、ハイヒールなんか穿いて何処へ行くんだろうと思つて、ハイヒールから眼を脚のウラの方へ移すと、縫目がある。足に縫目がある筈がない。思わずウフフと笑えるのである。面白い発見と云える。

〔六一〕

俎は白く乾いて妻の留守　（呑水）

「オイお茶をおくれ」「オイ、シャツを着かえるよ」「オイ、銭湯へ行くからタオル」をと何から何までワイフの手を煩わしているサラリーマンにとつて、妻の留守と云うことは実に物足らなさを感じさせるものだ。たそがれて行く台所にポカンと一人待つていると物悲しくさえなるものだ。俎が白く乾いているのヘフト眼をやつた時の淋しい気持が、この句にはハッキリ出ている。

〔六二〕

女房もう先きに寝るのも憚らず　（鉄洲）

「あなた今晩遅いのでしよ」と夫の出がけに一本クギをさしておく。そうなると、夫の帰宅の遅いことも定石通りである。それを、いつまでも待つているほどの若さもなければ色気もないのが、月並な夫婦生活なのである。この家の女房としての安定感が、サッサと寝てしまうのである。中年以上の女房の心理を巧みにつかんでいる。

〔六三〕

エレベーター押し込められてお辞儀され　（花村）

デパートへ行く。六階の催し場へ行く人たち七階の食堂へ行く人たちが、ゾロ〳〵とエレベーターに這入る。押し込められるだけ押し込めドアを閉ざす拍子に、外に立つエレベーターガールがお辞儀をする。テイネイにお辞儀をするくらいなら、こんなにムリに押し込めなければいゝのにと思うと、作者はおかしくなつたのである。ムジュンから来るおかし味を詠んだ写生句である。

〔六四〕

ざあますで受けられ舌がもつれかけ　（茶々）

心やすい言葉で談しかけたのに、ざあます言葉で受けられたので、こちらも急にあらたまつて、ざあます言葉に轉換した。ところが舌がもつれて、うまく談せなかつた。とつて異れと云うて持つて来る人があります。

驛天郎＝その外に川柳を通してみる「水のいろ〳〵」を、お聞せ下さい。

沒食子＝

ひなた水のような相手でくたびれる　（茶々）

春巣＝満年さんの奥さんの句でしたね。

路郎＝夕鐘君の句に

水はへるへる慾をとりもどし

と云うのがあるが、人の弱点をよくつまみ上げている穿ちの句だ。

暇乃＝

水眞先に座敷を通り抜け

と云う出雲市の緑之助さんの句もあります。

路郎＝

大阪のパン売切れた水見舞　（形水）

は面白い。

春巣＝

また水がと思う所に人が住み　（春雄）

沒食子＝

水害地牛もお暇が出てしまい　（百合子）

まだふえる水かだまつたまゝみつめ　（英子）

これはあの九州の時の水害で、熊本の花岡英子さんの作られた句で

云うのである。喜劇の一場面を見せられているようで面白い。

〔六五〕

自己批判酒に敗けたと思う日や　（湖山）

酒をさかんに呑んでる時に、自己批判なんて出来るものではない。自己批判をすると云うのは既に酒に敗けているからである。と云うように作者は観ているのである。

〔六六〕

一周忌遠慮さしたい女が來　（文蝶）

亡友の一周忌に、友が生前に愛していた女がやつて来た。焼香する人たちにまじつて女も焼香している。しかし、私たち友人から云えば、今日の列席は遠慮さしたかつた。噂ぐらいは知つていたであろう未亡人の心を乱したくなかつたからである。この一句はそうした複雑な心境を詠いつくしている。

〔六七〕

落ちぶれた友へお櫃のまんま出し　（小松園）

友情のこまやかさがよく出ている。「お櫃のまんま出し」が、この句のいのちである。

落ちぶれた友のガツ〳〵して喰べている情景が眼に浮んで放れない。

〔六八〕

見て見ないふりで同職見て通り　（卯之助）

別にライバルと云う訳でなくても、同業となると、流行つてるか、流行つてないかが気になるものであるし、どんな品をならべているかが気にかかるものである。

そうした心理をうまく促えたのがこの句である。人物が躍動している。

〔六九〕

あきまへんやろかと借金氣が弱し　（淡舟）

この句の借金が、大金でないことは云うまでもなかろう。相手方はソレと察して、ボツ〳〵予防線を張つていることも想像に難くない。漸くにして切り出したところ、

「こつちが借りたい位だ」

とニベもなくことわられた。

「あきまへんやろか」

と、上眼すかいですがりつく。「お気の毒だが……」と云つたきりである。

〔七〇〕

悪銭が身につき板につく名士　（沐天）

名士と云うのは、代議士でもあろうか。汚職の常習で、いつのほどにか神経が太くなつているので、贈賂も収賂も平気でやつてのけるに違いない。

「先生あの件、なんとかならんでしようか」

「ボクにまかしとけ。なんとかしてやるよ」

「お礼はコレ位出せるんですが……」

とユビを一本立てる。

「一千万か。それだけ出せばなんとかなるさ」

「ではお願いします」

「OK」

と、アッサリ引きうけるところも、板についたもの。「身につき板につく」の表現の仕方も巧い。

〔七一〕

檀家から歸る尼僧は梅を持ち　（稔一）

檀家、尼僧、梅と云う素材で組みたてられた一句が、尼僧の環境を一枚の絵にしている。そこには、らしさと云うものが流れていて、少しも不自然さがない。梅でなくても、山吹でもいいではないかと云う意見が出ないとも限らないが、そうだとすれば所謂動く句となる訳だがこの句の場合、梅がピッタリしていることを、よく味わつて見る必要があろう。

〔七二〕

不渡りと知らぬ女將は靴そろえ　（梨花）

今のあそびは月が出た〳〵や、黒田節で、ドカ〳〵と来てドカと帰つて行く。拂いと云えば会社の小切手。ウツカリすると不渡りと云う。コレでも遊んだ気がするとは、世も末やと云いたくなる。

お勘定の小切手へ三拜九拜した女將、飛んで下りて靴までそろえたのに、不渡りとは、そりや聞えませぬと云つて見てもあとの祭り。人物躍動。

すが、その時の情景が、よく出ています。

路郎＝芽花君の句に

優勝はしても幕下水をくみ

と云うのがある。水に関係のある言葉で水呑百姓だとか、水も飲めんと云う言葉もある。水臭い話だとか、夫婦仲に水をさすとか、水つぽい味だとか、あのことは水に流すとか、云う言葉があるが、なかなかそれ〴〵に適切なとこえ使えば面白い言葉だと思う。

摩天郎＝それでは愈々最後に、末期の水を、

春巣＝まつごの水の句は、あまり見当りませんね。あんな時には句は生れないでしようね。

沒倉子＝そうですね。

葭乃＝利生さんの句に

大阪の博士死水とりに行き

と云うのがありますよ。

春巣＝阪大の事務長さんをされていた利生さんだけに、よくみていますね。

葭乃＝親族の手前、大阪からわざ〳〵一度は、博士に診察して貰つておかぬと云うところを詠まれたのですネ。

路郎＝往診したらもう死んでいたと云うのが多いんだろう。家族の虚栄のあらわれだ。

摩天郎＝ではこの辺でどうも、有難う御座いました。

（摩天郎筆記）

石曾野先生行狀記

堀口塊人

石曾野先生は、人声に目をさました。午前二時頃である。村医という職業がら、深夜に起こされるのは珍らしくもないが、少し様子がちがう。道をへだてゝりんごの果樹園があり、麦畑がある。硝子戸越しに闇をすかしてながめると、麦は低いが、りんごの花ほの白くその背景に学校の屋根が黒い。数人の男が校舎から何かを運び出して居る。停つて居る自動車のエンヂンの音がする。たゞ事でばない。これをたしかめた先生は、寝巻姿の夫人をはねのけ電話口に飛びついて、「集団強盗」と叫んだ。

浅間へ三里、松本へ二里、村の平和は、ジープの警笛と半鐘の乱打によつて破られた。各所から出動した武装警官と消防団と青年団と彌次馬連中に包囲されたのは十二名の村会議員である。酒の匂いがして居る事は言うまでもない。この匂いは群衆をいきりたゝせるのに甚だ効果的であつた。

「何だ、何だ。」

「この醜状は何事だ。」人々は口々に叫んだ。豪雨まさに到らんとして風楼に満つの光景である。

「いや、これしきの事に、夜間の出動とは甚だ御苦労であつた。」村会議長、鼻村大助はおもむろに口を開いた。こんな時にあわててはいけない。

「我々一行は浅間温泉で行政視察の後、二台のタクシーに分乗して帰途についたのでありましたが、はからずも当所に於て二台とも小川にはまつたので、学校から丸太棒やロープを持出し自動車を引上げんとして居たのであります。幸にして負傷者もなかつた事であるから、諸君はこれで御引取を願いたい。」と説明した。他の村会議員は議長一任という顔で沈黙をまもつて居る。

「深夜の喧騒は軽犯罪法違反だぞ。」

「午前二時迄行政視察とは何事だ。」

「春駒の膝枕とちがいますか。」などと、彌次が飛んだ。春駒云々は彌次の悪趣味である。

「事は村政の機微に属する問題であるから、かゝる場所で言明の限りではありません。今夜はおしずかにお引取願い度い。」わるびれぬ議長の言葉にその夜はそれでおさまつた。花は紅、柳は緑、村政の機微は漏らすべからず。

鶯がしきりに鳴く。

桑畑の緑があざやかである。

はるかアルプス連峰を望む山ふところの丘では村会が開かれ、鼻村村会議長外十一名に関する問責決議案が上程されて居る。

石曾野先生は傍聴席で無性髭を抜きながらさつきから居眠りをして居た。鍛冶鉄こと森鉄五郎は一新会の斗士である。当年四十二才、村の蹄鉄屋であり善人であり熱血漢であり斗士ではあるが悲しいかな議員として甚だ語彙に乏しい。その乏しい語彙に熱情を注ぎ込むのであるから口角泡を飛ばし、顔面は紅潮するが、論旨は常に徹底しないのである。

「そも〳〵鼻村議長さんは」と言いながら、しまつた、と思う。こんな時に「さん」は要らなかつた筈である。要らなかつた筈であるが、言つてしまつたのであるから仕方がない。唾は再び口へ戻らぬ。鍛冶鉄は何とか言わねばならぬ。温泉で飲むばかりが村会議員ではあるまい。

「村政刷新のためになつとらんであります。村の大事な大事な、ぜにをつこて、いつまでもいつまでも、春ちやんの手をにぎつとつてはいけないのであります。そいで、このおれは、いかんという事に、さんせいであります。」ノーと言うべき事にイエスであります、と言うロジックになるが、この意味、わかる人にはわかる筈である。

石曾野先生は、パチ〳〵と手を叩き、自分の拍手で、正気に戻つた。うつゝで聞いて居たから主旨がわかつたのではない。たゞ熱血漢、鍛冶鉄に対して何となく拍手が送りたかつたのである。

鶯が又鳴いた。つばくろが議場を飛びぬけた。信濃の春である。

五十二才、廿四貫、鼻村議長はおもむろに壇場に足を運んだ。彼の崇拝する好田首相に似た風貌である。彼は、さつきから、一寸まずかつたなと考えて居たのである。春駒一人だけこつそりという事にしておけば、こんな問題にはならなかつたのである。然るに村会議長の肚を見せて、議員全部に、その親心を出したのが、いけなかつたのである。書入れ時の土曜である。妓を十二名より揃える事が出来なかつたのである。そこで敵役の無い八名の議員、それも一新会所属の者ばかりを、散会と偽つて帰し、民友会の十二名のみで水入らずの民情視察をしたのがまずかつたのである。それが自動車事故によつて判明したのである。否、石曾野先生の軽率なる電話によつてこゝまで発展したのである。遠因は妓の不足であり、近因は軽率なる電話である。

「先程来、森鉄五郎議員は、本職が、村政刷新に関し不熱心であるかの如き言辞を弄されたのでありますが、これは本職に対する重大なる軽蔑であり、侮辱であります。村民の支持に依り在職五年、本職村政刷新の為とあれば、常に欣喜雀躍せんとする者であります

す。」

彼は一発ぶつ放して、どんなもんだ、という顔をした。彼は欣喜雀躍の意味を知らない。村の人心を収攬する為めには、出来るだけ漢語を使用すべき事を戦前から心得て居る。終戦後は、それに英語を加味すべき事も心得て居る。民主々義とは演説の中に英語を使用する事であり、進歩派とは弁証法的用語を使用する事かもしれない。

「そも〳〵かゝるトラブルの発生したる所似のものは、吾人の行動に対する全くの誤解でありまして、吾人が今度の行政視察を意図したる所似のものは、かの美鈴ヶ原に保安隊の演習場が出来る、演習場が設置されましたならば、当然当村にも、娯楽街特飲街の必要が予想されるのであります。そこで、特飲街の在り方は如何に在るべきかと、参考の為め村政に熱心なる同志の諸君と共に、浅間温泉に行政視察を断行したる所似であります。再び、どんなもんだい、という顔をする。大助の大助たる所以である。

「夜中までか。」と傍聴席から声があつた。

「視察が長時間に及びましたる所以のものは、――」どうも、所以のもの、が多いようである。鍛冶鉄は議長の雄弁に聞惚れながら、自分も今度喋る時は、ゆえんのもの、を使用する決心をかためた。かゝる決心をかためるところが、鍛冶鉄の鍛冶鉄たる所以である。

「特飲街に於ける職業婦人の猟獄をきわむる時刻は夜半十二時以降でありまして、それ以後でなければ行政視察の庶幾の目的を達成する事は不可能なのであります。」これで、とゞめを刺したつもりであつたが、その時

「春ちやんはどうした。」と、わめいた者があつた。

『月岡星子女史―春駒の本名で天地神明に恥じざるものであります。」石曾野先生は、とう〳〵出たな、と思つた。鼻村大助の演説は、終りに必ず天地神明を出す事になつて居る。これを出さなければ喋つた気がしないのである。大体、村民は、天地神明、とか粉骨砕身、とかのお題目が好きなようである。犬飼文学青年の如く、青

同舟近詠

松山市　前田伍健

のど自慢問われて言えぬ職を持ち
いやらしいおじぎ選挙が近くなり
言論は自由わい〳〵言うばかり
お答え致します蛙の面に水
村芝居みな生卵すゝつて出
だまされて居る顔時に美しく

大阪市　麻生葭乃

脊に腹はかえられず此処も屋根を葺く
女の友情ながい〳〵手紙書き
注射マニアの奥様に日の永き
事務多忙一輪挿も邪魔がられ

長野県　高峰柳兒

默々と汚職に遠い椅子に耐え
愛の巣の産声それから許される

ある――をアッシスタントとして採用致しましたる所以のものは、彼地の事情に通暁せる者の案内を必要としたる為めでありまして、その後の我々の行動はすべて村政に熱心なるあまり断行したる所以であり、若し不徹底なる視察に終らんか、これこそ村費を濫用し、虎穴に入つてタイガースを得ざる結果となるのであります。吾人は楼へお母ちやんの好きな饅頭を買いに寄つた、というが如き、軟弱なる表現は好まないようである。鼻村大助、不肖なりと雖もこの呼吸を心得て居る。虎児と言わずにタイガース、と表現したのはこの地方は田舎の割合に野球が普及して居るからである。

問責決議案は否決された。

逝く春の村会は終つた。

雨の日曜である。家族はみんな留守である。石曾野医院の前の小川を花片が流れる。里はすつかり葉桜になつて、麦の穂が伸びて居るのに、美鈴ヶ原高原では花がこぼれるらしい。村会議員が又々、別府へ出発したので村は急にしずかになつた。何でも、この間の浅間温泉の行政視察では、一部不参議員があつた為めに、若干徹底を欠くところがあつたので、今度の別府の行政視察では全員が徹底的に調査研究する事になり、鼻村議長のこの提議に対しては、民主々義を堅持する民友会も、平和を死守する一新会も、満場一致で賛成したそうである。馬鹿をみたのは石曾野先生である。あれから、自己の軽率なる電話が村を騒がせた事について、しかるべき筋へは、一升瓶を提げて挨拶に廻らねばならなかつたからである。たゞ一つ青年団からは感謝状が届けられた。『多年村政刷新に志厚き貴下は、今度、民警協力、官民一致の実を発揮せられ――云々」というのである。然乍これは猫に小判である。石曾野先生と雖も、一枚の感謝状よりも一升瓶を愛するが故に、である。感謝状とは良心の領収書の如きものであるが、こんな世の中なら、良心を領収されるより、良心を麻痺さす方が愉快ではないか。

雨の休診日である。先生は書棚から手当り次第に本を取出す。石鼓文を表紙とした全集である。開くともなしに開いてみる。

生死困縁無了期
色相世界現狂痴

の文字が見られた。次は、路郎師の句集「旅人」である。ぺら〳〵とめくつてみる。「雨の松本にて」の前書が目につく。

遠く来て信濃に山のない日なり

「山のない日なり、か」石曾野先生は誰にともなくつぶやいた。いつもなら、柿若葉の彼方に悠然と姿を現わす日本アルプス連峯の白凱々たる景観も、今日は全然見えない。空は灰色である。路郎師の山を見なかつたのは、今日のように降雨の為め、山が見えなかつたからであるが、村会議員の連中は、見えて居ても、見ないようだ。

「附記」これは全然架空の物語であります。文中、しなの誌の石曾根氏郎氏に似たる人物や松本市近郊の風物が出て来るのはロケーションの際小生の脳裡に撮影したまでの事で、実在の彦根城が映画では赤穂城として上映されて居るようなものであります。念の為めお断りしておきます。

川柳塔・近作柳樽・一路集・各地柳壇の投句に便利で経済的な
川柳雑誌社特製
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料　八円
をおすすめいたします

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

花屋の前に佇めば善人めき　宇部市　上林　粗影
公傷が癒えて地下足袋乾き切り　同
障子張り替えて亦理想燃え上り　同
レンゲタンポポすでに人手に渡った田　同
ファッションショーの女は燃え男ばくさる　同
宿題が判らぬまま父夕刊に移り　同
質札を見せて呉れとは貴族趣味　同
奥様の顔もテリヤに似て御座る　大阪市　石川ひさみ
名を捨てゝ仲居ごときに生け捕られ　同
悲しくもないのに女鼻で泣き　同
ジンマシンだして男は逢いに来た　同
死の灰が落ちて来そうな雲になり　同
こんなこと平気で云える夜の道　岡山縣　梶尾　節子
薫風へフオークダンスの曲が乗り　同
ハネムーンだなと赤帽ついて行き　同
木賃宿思い〳〵の荷をひろげ　同
家留守にして宮城へ清掃隊　今治市　長野　文庫
甘党と辛党胃散では一致　同
法にさえ触れねばと云う金儲け　同
停年を利用する気で雇いに来　同
スマートな服はつきりと損を云い　吹田市　梶川　蘇堂
稚兒の列羊の如く辻を折れ　同
アパートの畫呉服屋が取り卷かれ　同
文化とは板間の隅の洗濯機　同
短冊の哀れおしることは書かれ　玉野市　渡辺あきら
胃を病めば胃病患者の多いこと　同
まかせ〳〵と云うてたくせにもう忘れ　同
校長を呼び捨てにする父を持ち　同
勉強の机にひばりのプロマイド　兵庫縣　吉原　紅月
ハイヒール畔道歩く靴でなし　同
ヒステリー夫人の眼鏡よく光り　同
爪切つて虫のよいこと考える　同
月賦すむ頃からスーパー狂い出し　貝塚市　津田　千舟
雞つぶす庖丁雞の前で磨ぎ　同
医療扶助受けてゝ政府こきおろし　同
出張の旅夏場所も見て帰えり　同
正札に驚く傍で人は買い　岡山縣　中田　野川
若過ぎる奥さんにバチダコがあり　同
不遇でも善人の眼の澄んで居り　同
折れるのは俺ばつかりで円くゆき　同
特賞のテレビの維持費まで呉れず　京都市　坂野壽利庵
風体も適役というピケ・ライン　同
熟慮しているのを日和見だと吐かし　同
余つてる筈の女にまたふられ　同
新しいかばん大きく振つてゆき　岡山縣　石原　文郎
落書のこゝにもピカソ展があり　同
宿題はよせとグローブさげてくる　同
失業が恩師へ便り思い立ち　同

雑筆春秋

川柳と自由律詩に対する私見

川端柳風

世変り明治の御代となるや、欧米文脈の流入により日本文学が急速に発展した事は文学史上歴然とした事実である。又韻文より散文への移行は詩の分野にも大きく影響して、散文詩等という畸形児を産み出す結果となつた。しかし、「詩の本質を詩的精神が詩の表現を取つたもの」（「詩の原理」より）とする時、吾人は自由律川柳に反対するものである。

俳句に唱えられた自由律は、川柳にもその影響を及ぼした。この自由律と十七字音俳句について俳人高浜虚子先生は、「（前略）発句の十七字が独立して俳句となりました。だから俳句は十七字であります。これは歴史的に明白な事実であります。しかるに十七字はもう陳腐だから十七字でない俳句を作るという人があります。それ

初給料まずはパーマとおしること　大阪市　藤村　梨花
味つけるとこまでしとく共稼ぎ　同　同業がまたウインドを覗きに来　出雲市　原　章坊
話すこともなくなりやつと結婚し　同　風の日の焚火守衛の印が要り　同　同
妻の愚痴封じる様な鼾かき　同　賽銭の紙幣よむ宮司俗な顔　同　同
引導鐘ジンタが奪う天王寺　池田市　太田　木声　地球みなツンドラにする灰が降り　同　小島さぎす
祈るより稼げと神の灯に触れず　同　資本主義病む人生へ苛酷すぎ　貝塚市　同
職人の長い着物は病んで居る　同　朝の試歩働く人の眼に出合い　同　同
停年の後鶏に養われ　同　グラビアの故郷をみなに見て貰い　同　同
風呂へ行く留守へラジオを掛けたま、　山口縣　岡本　鳥石　春の風マスク苦しいものとする　同　岩田十三楼
花咲いて蜂へ野山の廣いこと　同　生前は敵弔辞に念を入れ　福岡縣　同
應揚な気が金持にして呉れず　同　叱つてゝ妻の多忙は知りは知り　同　同
應揚な社長へみんなよく動き　同　特別にやいと熱がる村のボス　同　同
親切を受けた車窓に妻の青　岡山縣　南部ひでを　会社を困らせて会社の爲と云う　同　同
ファブションショー見つめて耳輪揺れもせず　同　みそ汁のまずさ上京第一信　大阪市　早川　野甫
見送りは発車汽笛でもう帰り　同　ちんどん屋うちの子一番前にいる　同　同
幸福な夫婦へ鶏の生みつづけ　同　トイレット伸びする外は若葉萠え　同　同
庖丁にゼスチュアがありすぎを切る　大阪市　安井　蜂呂　失脚で舞台が廻つていたを知り　同　同
スピッツが廊下から俺を見下す　同　衣更天気続きへ母忙し　西宮市　小浜　牧人
訪問記歌姫妻であり母であり　同　母の日の脊中を小さい手で揉まれ　同　同
タイピスト採用通知無雑作に　同　子の弱気己の過去へ案じられ　同　同
大人のどんちようゆるくゆる揺れ　岐阜縣　伊藤とみお　お相手に芯の疲れる御気に入り　同　同
トーストを頬ばりやさしい事を言う　同　ブドー酒が出たのと妻が酔つて来る　兵庫縣　酒井ひか平
母ちやんになるとけなげな六つの子　同　唄うよにマダム従弟を宣傳し　同　同
病床で人の退職金を読み　同　素人ではあかんと屋根を降りて来る　同　同
糸屑を畳にまいて嫉妬する　大阪市　不二田三夫　五六本抜いた白髪を見せられる　同　同
女一枚一枚脱いで美しい　同　亡き母の夢はせわしいたすきがけ　大阪市　安井　久子
昭和の離婚は明治を呆れさせ　同　中共と国府並べて切手帖　同　同
料亭はさびれ差入屋は栄え　同　人生の此処らでほしい道しるべ　同　同
盛り場の朝は疲れた様に明け　同

は俳句ではないものを作るのです。（後略）」（「俳句読本」創元文庫）と十七字俳句説を説いている。同じ字数について川柳家は、「（略）川柳は十七音字中心の人間陶冶の詩である。」（「新川柳講座」「川柳雑誌社」）「川柳の字数（調子）は、五・七・五を守る事にして頂きたいのです。」（「川柳読本」創元社）「（実際的経験からと前書きして）平凡人の持つ力なり、性質なり心理なりを考え合わせますと、十七字は川柳の絶対的条件であるという定規を置くことが、川柳の秩序のために必要ではないかと思います。」（「わだち」ふあうすと社）この中で路郎先生は、「十七音字」に依つて川柳の形式をかなり自由であると説いているのである。

古来日本文学は、「記紀」をはじめ「万葉」・「古今」下つては「江戸文学」とあらゆる文学が韻文に依つて成立している事実を確認する時、連歌・俳諧・前句附と変り天保三年四世川柳によつて狂句として独立した現在の川柳が、十七字である事は当然の姿であり、五音七音を基調とするのは日本語の特質でもある。五音七音が漢詩の影響なるの故を以て、川柳の定型を否定する事はできない。形式は移入されたものであつても、五音・七音は日本語の伝統的

ハイヒール虚榮に快くひびき　岡山縣　宗高八ツ茶
パチンコをせぬ夜は俺と対持する　同
奥さんはしつかり者と馬鹿にされ　同
盃の空かぬ脊中をどうづかれ　同
煙草止めたら菓子代に困らされ　廣島市　藤原　幻詩
子沢山家族手当だけ羨やまれ　同
税金を引いて薄謝を送つて来　同
母の乳房なんにも云わずしぼんだ　大阪市　武部　若菜
大衆へ耳をふさいだ私鉄スト　同
おつさんのズボンで林檎拭いてくれ　同
桃袋世間話で掛け終る　岡山縣　国富　直人
農繁期油がきれた母の髪　同
嫁ぐ日の迫つて母の背を流す　同
タイピスト指先固く嫁きおくれ　神戸市　岩田　一夜
網棚に忘れる辯を膝へ置き　同
メーデー歌口の中まで土ぼこり　同
うらなりの胡瓜に似たる細い腰　岡山縣　大塚美能留
禿ゆかけてオールバックに変えて見る　同
ピンボケがいゝ記念だと燒増され　同　戸田　悦子
星の数の男一人を選りそこね　大和高田市　同
恋人が欲しい整形科へ通い　同
押賣に似た仲人をもてあまし　同　神谷凡九郎
夫婦愛唯なんとなくなんとなく　大阪市　同
子供連れやつぱり酔うて帰つて来　同
空の青正義の所在信じたし　同
倖せは今宵蒲團へ陽の匂い　熊本市　高野　宵草
子供ぎらいそれで男は事が足り　同
修身科叫んでいてて汚職する　同

夏型に結えば妻にもある色気　愛知縣　岩川　寛虚
サンダルに乗つて末つ娘が好き　同
妾宅へ旅の鞄を先づ下し　同
乳房まで整形をして嫁き遅れ　米子市　勝田　正郎
呼捨てにするは社長のいゝ機嫌　同
美しい眼鏡の奥で嫉妬する　同
春雨へチリもひねらず寢てしまい　岡山縣　国正兼比羅
誘惑に勝つて辞表の手がふるえ　同
母の亡き父の晩酌淋しそう　岡山縣　松下　泣虫
麦を刈る老父の見ゆる窓をしめ　同
陽炎に空気がタツプダンスして　石川縣　中松　一恒
知つた事じやなし負け馬いなけり　同
暗がりが余計気になる月給日　岡山縣　田淵　紫笑
初恋はオールの上で手を重ね　同
十七のアルバイトという紅をつけ　岡山縣　田淵　笑鬼
猫の眼も気になる年に娘は育ち　同
しみじみと話す仲居は酔うている　大阪市　丹波　太路
お点前を褒める茶碗の歪みよう　同
給血者が俺より蒼く痩せていた　岐阜縣　石神　古木
看護婦に惚れて灌腸言いそびれ　同
囲われた女のように金魚いる　大阪市　板東千代美
宝塚今日は未生の友といる　同
固定収入檀家の年忌指を繰る　京都市　松下京一楼
返事だけしといたあとをきゝ直し　同
陳情の二度目は別な闘士が来　出雲市　久家代仕男
ニコヨンの芝を植えてる長閑さよ　同
発車ベル鳴る改札へおよぎつき　岡山縣　檀原伊佐武
衣更妻案外な腰の線　同

な韻律となつており、川柳は日本独特の短詩形文学であるからである。

近代文学を主張する現代川柳は、因襲的柳多留の穿ち・滑稽味・軽味に基定づけようとするものではない。吾人は柳多留の精神、換言すれば、この三要素の上に近代感覚を詠み込もうとするものである。即ち内容によつて形式を決定しようとするのではなくて、詩の形式に如何にして内容を折り込むかという、所謂欧米文脈を如何に日本文学として消化するかに現代川柳、俳句界の悩みがあるのである。「言葉の性格を理解する者は、おのずからそれを乗り切つて行くための形式を必要とする。」（中河与一）絵画の感覚は文学をもつて説明し得ても、その色彩をそのまゝ文字で再現する事は出来ない。音楽をもつて哲学の説明は出来ない。それと同様に韻文と散文とはおのずからなる担当部門があるのである。

坪内逍遙が「食客」について「（前略）哲学者が縦横に筆をふるい、十二行二十五字三十枚書いて分らぬところへ

「居候三杯目にはそつと出し」

と云えば「ハテ成程（以下略）」（「川柳の書」より番傘川柳社）と、川柳の意匠を説明している如く、他の文学で説き得なかつたも

くしやみするにも舞の手の袖屏風　京都府　堀口　欣一
ぜいたくはしつくして来て海苔茶漬　同　佐藤　泰之
傳説の山峡青い眼も訪ね　出雲市　同　高田　一夫
疑獄よりモンローの尻気にかゝり　大阪市　同　中村九呂平
大阪の灯がなつかしい旅帰り　大阪市　同　川端　柳風
キヤバレーのネオン禁酒の眼にまぶし　ド關市　同　佐藤千代春
代筆の無礼末尾に詫びて居り　同　佐藤千代春
どつちみち赤字晩酌つけさせる　同　本多　省三
約束を破る綺麗な嘘が出来　出水市　同　石川素百々
アルバムの昔は捨てた顔でない　倉敷市　同　谷口　流水
観光車傘の産地を通りぬけ　倉敷市　同　土守トン坊
薫風に藥が混じる療養所　大阪市　同　菊田いさむ
学問のつもり角帽ストもやり　大阪市　同　原　独仙
是からのアトラクションへ子に寝られ　同　正口　辰始
再軍備名刀見せて論じ合い　石川縣　同　永松東岸子
清貧に甘んじ世相を憤り　岡山縣　同　三好　兵六
やつと瓦斯引く頃家はすゝけとり　岡山縣　同　三好　澄泉
あいそうのよすぎる妻へちょつぴ妬け　貝塚市　同　三木　泡起
南風吹けばビキニの灰が気にかゝり　貝塚市　同　深見稚樂太
眞四角な見舞に病人気がつかれ　滋賀縣　同　中塚　夢生
買物のアクセサリーに子を借られ　尼崎市　同　飲田　柳庵
大分に儲けた話従弟する　同　坂手　有子
ネクタイをゆるめて酒へ腰を据え　吹田市　同　木村　十悟
やりくりも馴れてますわと後妻くる　岡山縣　同　菅田　眞
母の日に母なくせめて灯をともし　出雲市　同　野口卯之助
暗号で女になつた日の日記　宮崎市　同　野口卯之助
一割二分こゝも庶民の利子で喰い　大阪市　同　野口卯之助
手土産に梅雨前線の放射能　岡山縣　同　野口卯之助
珍客へどうだどうだとさわらせ　岡山縣　同　野口卯之助
また取られそうだが桃の袋かけ　神戸市　同　野口卯之助
後から見られパチンコは入らない　神戸市　同　野口卯之助
大掃除こけしの顔も拭いてすむ　同　野口卯之助
ミキサーがデンと乗つかる新世帯　大阪市　同　野口卯之助
本日休業のカーテン白々と　同　野口卯之助
電球が幾つ切れよが妻の留守　大阪市　同　野口卯之助
不景気が何よりきいて元の鞘　大阪府　同　野口卯之助
満員にさいなまれ馘におどかされ　大阪府　同　野口卯之助
焼けてから養子の意見よく通り　同　野口卯之助
どうぞと云わせ乳房をふくませる　尼崎市　同　野口卯之助
掌の豆が連綿体をあざ笑い　同　野口卯之助
教会の中でフアッションショーが見られ　愛知縣　同　野口卯之助
織姫の腕には三針手に「平凡」　大阪市　同　野口卯之助
臍曲り来て寄り合の座がしらけ　大阪市　同　野口卯之助
右左ガイドの声に目が走り　同　野口卯之助
どん底の心の闇に灯を点し　岡山縣　同　野口卯之助
一徹が出てゐる老父のはがき文　岡山市　同　野口卯之助
民主々義オトギの国のことでした　岡山市　同　野口卯之助
驚に起されている果報者　同　野口卯之助
母さんの趣味が明るい家にする　岡山縣　同　野口卯之助
隣りの子お菓子をやればすぐ帰り　同　野口卯之助
手初めは苦情を云わぬ猫を撮り　岡山縣　同　野口卯之助
方言が通用しないもどかしさ　同　野口卯之助
惜しみなくほれた弱味の金を出し　宮崎市　同　野口卯之助
愛すればこその嫉妬が火と燃える　同　野口卯之助

のを、僅か十七字でもつてズバリと言い切るところに川柳の生命分野があるのである。たゞこうした狂句的なものではなく、如何にして文学的に表現するかゞ現川柳界に課せられた問題である。

R・H・ブライス先生の言葉を借りると、「川柳は逆に詩的でないものをはつきりと示す事に於いて詩であるといえる。」（「世界の諷刺詩川柳」日本出版kk）

柳多留は江戸ッ子気質である。当時の文学が義理人情を好んで取材した中に、川柳はこれら文壇や庶民の要求とは全く別な一段高い所から、これら文学・社会・人間・自然までを微笑しながら眺めている。この公明な観察眼は文学至上の境地ではあるまいか。又十七字という簡潔さと五音・七音の韻文は日本人独特の詩的リズムとして庶民の心の中に溶け込み、柳多留百六十七篇という未曾有の大書を産み出したものであろう。

五音・七音は日本語の伝統的基調であり、日本人の息吹きであ

にきひとり美顔水
長谷川天香

気にいつて祖母が火を見る新かま　兵庫縣
ぎこちなく座る妓よそにコツプ酒　大阪市
一言で男同志は信じ合い　今治市
貧しさに負けまいエプロン眞白い　松阪市
映画見て来てから趣味がまた変り　出雲市
いい雨だなと金の無い日曜日　赤穂市
酔どれに電信柱撫でられる　大阪市
コツプ酒子供は熱を出している　同
首から下はいつも廿代　石川縣
水爆の灰を降らせて花早く　同
貧乏もまたよし小菅へ用もなし　同
飲代にしろと納めた税でなし　萬濃　修
雨上り牛の尻にも春の泥　岡山縣
独酌も苦し五月雨続く夜　同
頑固さは誰にも負けぬおばアはん　坂本竹ん馬
サイクルの弱さ時計を不良にし　同
やりくりをそろばん玉に笑われる　川西　去水
家計簿が紙の日傘でがまんさせ　福田　卓風
ズボンにも独身でない折目たて　同
お人柄明石の柄を引たたせ　同
人生の出直しヒビのある体　貝塚市
お土産の指切りをして子は留守居　同
結局はお金で生命をすりへらし　荻原　竹郎
通勤は同じ道を歩くこと　同
ニコヨンの観光バスへ冷たい眼　杉森眞沙魚
女学生一人になれば澄し居り　同
頬紅は猿のお尻を思わさせ　山田ゆき江
まいて来た足をネオンの方へ向け　同

出口白猫兒　同
越智　義夫　同
萬濃　修　同
坂本竹ん馬　同
川西　去水　同
福田　卓風　同
荻原　竹郎　同
杉森眞沙魚　同
山田ゆき江　同
浜口志賀夫　同
安永芙美子　同
久保　和友　同
眞鍋　悦朗　同
森本黒天子　同

無口なる人と思えぬ野球狂　大阪市
結婚の祝詞職場で軽く受け　同
杯に浮いた花びら飲んで去に　倉敷市
居眠つてるても悪口だけはきゝ　同
母の日は結局母のお膳立　岡山縣
母の日の父は会計課長なり　同
坐り込んだお蔭でやつと餅になり　和歌山縣
双方へ仲人レントゲンも見せ　同
遠足の朝は子供に起される　尼崎市
春雨も濡れて行けない放射能　同
昨日なら有つたと無心断わられ　廣島市
先生のストは授業を親に見せ　同
雨の漏る音へ読書がはかどらず　八代市
初夏の宵ナイトゲームへ恋が伸び　同
内職の汗で上つた鯉のぼり　高知市
うたゝ寝の三畳足で用をたし　同
倒産が近い小切手書きなぐり　奈良市
昇給へ座り込みとは別な顔　同

腰椎掻把手術を受く

貸借をきれいにしとく手術前　貝塚市
煩悩の浮世へ帰る酸素吸う　同
紳士的ズボンの筋が眞直だ　堺市
ナイターになつて遅刻が多くなり　大牟田市
修繕をした雨もりは位置を変え　大牟田市
仔犬にもしつけを見せていゝ暮し　同
もう一度騙された気で貸してやり　倉敷市
怒つた顔がとてもステキとからかわれ　同
池へ来て吾は孤独な生れつき　大牟田市

宮崎　貴代　同
岡野風の子　同
佐々部　佐志　同
西岡　春風　同
武田　幸子　同
御戸　凡平　同
淵川　秀敏　同
有友　純男　同
絹下　南天　同
小田　柳叟　同
辻　圭水　同
福永　凡八　同
野田素身郎　同
吉村奈良夫　同

ある。その中には剛さもあり柔さもある。これを古いとのゝしり自由律に走らんとする者は、日本語の駆使に行きづまつた敗北者である。現代川柳は近代感覚の挿入ではなく、近代感覚の消化である。それは決して形式の変革ではない。川柳の形式は既にその発生当初より決定されているものであり、川柳の課題は内容の充実、言語の駆使にある。形式を変えた時それは既に川柳ではなくなつている。自由律詩はこの点に於いて新時代に生まれ出た新文芸である。自由律詩は川柳でも俳句でもない新文芸として、宿借り的な存在から離脱して独立名称の旗印の下に、その発展を計るべきである。

繰返して言う。川柳は詩の一節ではない。十七字による独立詩である。

諸賢の御示教を希う。

猫礼讃

麻生梨里

兎角此の世は住みにくい。漱石じやないが何時もそんな事を考える。然し住みにくい住みにくいと云いながらも皆生きているから不思議だ。要するに人間と云うものは少々の智慧があるから始末が悪い。住みにくいとか住みよいとか、そんな事を考えなくとも生きているものは嫌でも生きているん

れんげ草平和はこんなに美しい　同
アベックのまだ坐つている根気　岡山縣　田口　紫陽
紅一ッ付けず野性美をほこり　同　古閑森行々子
死期せまる子に天国をといてやり　岡山縣　同　金井　文秋
丹前の尻が切れてる山の宿　大阪市　同　長尾　越鳥
銀行が角へのさばる繁華街　同　河楊　梵鐘
年波へ息子は違う道を行き　同　池田　古心
祝電をさすが代議士ぬかりなく　岡山縣　同　春名いくめ
母越える脊丈で飯もまだ炊けず　同　久保田青竹

路郎先生御全快

休止譜のそれから曲はさらに冴え　貝塚市　同　渡辺伊津志
團体がチンパンジーに引つかゝり　同　芝原　洋史
まゝごとで無いのに夫婦子が出来ず　岡山縣　同　宗貞　白馬
ワンマンを嫌えど亭主風吹かせ　同　菱田　満秋
近眼と老眼とありいそがしい　岡山縣　同　村上　旭堂
ネクタイを変えりや行く先あやしまれ　同　重永戍理智
ランドセル後から見る子の育ち　和歌山縣　北村　三歩
歌になり画になる僕の鯉のぼり　同　谷　一平
月賦とは云わず最後まで値切り　尾道市　同　石居　高志
ほれてるらしい挨拶にヘキエキし　同　星川　陽石
魚釣が好きで一日見て仕舞い　貝塚市　同　岡　藤四郎
葉櫻の試歩路へドテラのし歩き　同　多田ほなみ
溜息をつきつき見惚れる演舞場　下関市　同　荒川　勢園
女同志惚れたと言う妓の舞が冴え　同　向田妻陽子
ふるさとの記事あの道のあのあたり　天理市　同　赤塚　樂天
辞めたいと云いつゝ幹事の嬉しさう　同　増本　翠露
探しものしてりや帽子かと聞かれ　愛媛縣　同　藤田　蘇人
結局はお灸ときめたリューマチス　同　石田　沐天

長女出生

親の味判つて母の肩をもみ　鳥取市
家内中が抱つこして見る子の重さ
自動車のライトがきれい夜の構図　大阪市
媾曳の窓越しにおる鯉のぼり
子の育ち孟母の気持よく分り　大阪市
弁論部の男社会に出て無口
浪曲が好きで舅と馬が合い　玉野市
月賦なら買えると妻にねだられる
香水の香が無駄になる待ち呆け　下関市
君が代の電波南から南から
馬鹿の内に数えて自慢にへつらわず　下関市
吉日へ老眼鏡をかけなおし
調度品罪な値札で羨ませ　堺市
肥りたい気持夜食へ胃散服み
野良犬の慾情巷の雨に濡れ　下関市
賓客へ妻つきあいも一二杯
牛或日豚の徒食に腹を立て　堺市
マーケット二回廻つて世帯じみ
お相伴お床拝見させられる　大阪市
文化国自動車の泥浴びて立つ
没落の庭へ藤棚朽ちたまゝ　下関市
代筆の敬具で結ぶ女文字
失業がせめて坊やの馬になり　下関市
雨だれの音も淋しく胸を病み
片言でもう母親をなめて居る　下関市
ポケットを押えて降りる満員車
権力へ今日もよろめく民主々義　大阪市
汚職きよう先生々々の駅へ着き
アマゾンへ生きる覚悟の荷をまとめ　下関市

だ、と云えないこともない。大体人間と云う動物は自惚れが強くて、することが中途半端だ。理に動けば角が立つ——情に竿指せば流される——なまじつか利口振つて中庸を行こうとするからむつかしい。角が立つたつていゝじやないか、流されるなら一層のこと川下から海に出るまで流されたらいゝ、どちらかに徹底すればもつと生き易くなりはしないか、と私は思う。例えばである。他人のために尽すにしても、徹底的に尽すなんてことはしたがらない。——また出来ないかも知れないが——そのくせ尽している様な顔をしたがる。その点猫の生活を見ていると実に徹底している。「猫の手も借りたい」「猫よりもまし」と云う言葉がある程、役に立たないことも代表的である。お腹がすいたら餌をくれそうな人について廻

山銀の瓶

大阪市大淀區長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話堀川四四七番

お見舞の林檎は子等をよろこばせ　石川縣　桑山　とよ
窮屈な見舞の客に熱上り　堺市　林　澄子
角帽はカバンに入れて呑み歩き　尼崎市　岩田天保錢
その言訳がいかぬと税吏に叱られる　高知市　横田　放人
ボストンへおむつ風呂敷には玩具　岡山縣　中谷川太郎
封筒へ愛情みんな入れきれず　岡山縣　杉山　香平
振袖を着せてから母落付かず　岡山縣　福井一三三
家出とはあほらし猫の事かいな　岡山縣　松本十字星
退院へ歩巾をかえて歩いて見　岡山縣　三谷　柳蛙
クラス会今日だけ母のからをぬぎ　岡山縣　小沢　文糖
失職の腹いせどなるメーデー歌　大阪市　西口　鎭景
隆鼻術受けて見合いの日を決める　岡山縣　吉村　一鷄
本心を酒で言つてる小役人　倉吉市　赤松ＡＴ公
レインコート防彈チョッキのように着る　出雲市　伊藤　光二
欠損の続くも知らぬ顧問さん　大阪市　阪井　雅方
或女などと名前を伏せておき　金澤市　今井那智黑
きすのある胸を承知で抱かれに来　西宮市　明石　業平
遙々の土産車中に置き忘れ　岡山縣　鈴木　風鈴
里親の気性鯉にも見栄を張り　和歌山縣　椎名ひさご
ピクニック帰りの汽車の遅い事　和歌山縣　竹林　小雀
虚無僧の笛持つ姿蛸に似て　宇治市　前田　夢郷
しつけ糸つけたまんまで子は走り　和歌山縣　山本九里三
見合してそれから茶を立て花も活け　和歌山縣　柏木大入道
失意のピアノ中途でガバとふせ　西宮市　横倉漫多朗
やりばない寂しさ猫の脊を撫でる　和歌山縣　酒田　白樺
お経読む和尚凡人とは見えず　和歌山縣　酒田　清子
長生きをすれば人造米も食え　和歌山縣　西出　一栄
苦労だけして来たように見える母　倉吉市　坂倉　一正
寄附金を納め入学許可になり　新潟縣　中村九呂平

同　川西里ん坊
同　松下　蘇水
熊見地久平
及川　南洋
富池　茂人
松島　不在
岡　一門
藤田　美雪
和田一の字
大石　一久
奥谷　弘朗
竹原　雲平
川口　秋香
滝田　柾風
東浜　成子
安原　斜木
石本案山子
北平よし子
柿本　古竹
谷口喜久治
深田やよい
永藤　彌平
那須虎兒朗
松本　竹外
清水　初生
横山　宣昭
高野　不二

蛙の子は蛙だ優等まで無理だよ　石川縣
借金で行く遠足も子ははづむ　尼崎市
芸なしで花見に写眞ばかり撮り　鳥取市
麦秋も近く妻の手ふとく見え　愛媛縣
女湯へ泣く兒渡してひげをそり　大和高田市
袖カバー一家を背負う腕へかけ　津山市
膳が出て顔見合せるまぐろずし　大阪市
漫画読む暇で教科書読めと云う　小倉市
満ち足りた気持へパイプ光つてる　下関市
サンガーの効無く飾る武者人形　堺市
母の日のプレゼント代母が出し　堺市
三ツの歌父は茶の間で口ずさみ　下関市
原爆の雨結核に効いてくれ　堺市
モク捨い今日祭日へいどむなり　大阪市
書見器でじつと睨むは詰將棋　堺市
同情を待つなと母の手内職　和歌山縣
鯉幟立てし我が子は病んでいる　堺市
アベックに蛇春眠を覚まされる　堺市
女事務ほめて一輪もつて行き　玉野市
失業へ妻が里へと都落ち　堺市
鐘三つ貰つて亭主馬鹿に見え　堺市
田舎ではもうないんだぞ高く　尼崎市
盃が廻つた頃にあぐらかき　堺市
恋日記やがてセンチな詩も綴り　堺市
のど自慢おだてられても鐘一つ　大阪市
赤貧の中にあつても子等伸びる　大阪市
贈られしケーキも母の財布から　大阪市
母の日へさすがに娘プレゼント　大阪市
平凡な妻町内に利用され　下關市

つてニヤーニヤーと食物の請求をする。その変り与えられたものは文句を言わずに喰べる。お腹がふくれると日向に出て眠る。今度は飼主がいくら呼ぼうが、叫ぼうが「こちらの方に用事はありません」と見向きもしない。お美味いものは人の知らぬまにこつそり失敬して喰べる。見付かつたらちよいと頭を叩かしてやればそれでよい。別に弁償することもいらない。生まれた時に着てきた茶色のブチが、いくら流行らなくなつても着替えようともしない。体が汚れてくれば舌でなめつておけば風呂銭もいらん。こんな気楽な生活もようせずに、云うことが振るつている。人間と生まれたからにはそうは行かない。何故？「万物の霊長だから」と来る。誰がそんなことを決めたかと云うと神様が決めた訳でもないし、一寸も他の動物に相談もしないで勝手に決めている。動物の中で一番優れているのだぞオと威張つてみたつて、犬も猫もそんなことは問題にしていない。人間の自己満足に過ぎない。何と結構な自惚れようではないか。オギャーと生まれたら、泣いたり、わめいたり、騒いだりして、大抵は悟れないで死んで行く哀れな人間よりも、猫の方が、遙かに一枚うわ手ですよ。ちやんと世の中を悟つて悠々と暮しているのですからね。あなたは羨ましいとは思いませんか。

寝心地をなおして猫はまた眠り

人間横丁 (XV)

東野大八

死の座

私の家の東隣りの主人が、昨年暮ぽつくりと亡くなつた。病氣は胃癌、享年四十三、世にいう厄負けというやつ。

いゝ男で、一昨年の元日には私の家で終日飲んだりうたつたりした。この一日が彼にとつては、最後の晩さんのようであつた。息を引とる臨終の床で、彼はしきりに両手をたゝいてやめなかつた。まるで酔つぱらいの様に—

「貴方と飲んでる気分でいるんですよ、きつと」

と妻君が、私を顧りみて寂しくつぶやいた。

その声を耳にしながら私はひからびた病人の冷たいその手にふれながら、私自身の死の影を思い出していた。そこは戦場だつた。

迫撃砲の破片で、左腕の上部を貫通された私は、砲煙雨飛のなかだけに、私自身の手で水筒の紐と丹びの綱で肩口を厳重に止血した。しかし血はどんどんと噴き出る。仰向いて寝ている私の背中が血で、いつかぬかるみに身を置いたようにじとじとになり、それが別に不快とも感じないころになると、あたりは次第に茜色くなりはじめた。一枚一枚茶色のフイルターを眼の先につみ重ねていくように、刻一刻あたりが暗くなつていく。滴るようなアカシアの若葉も、四、五寸伸んだ麦の葉先も、枯れた葉タバコのようにみえはじめた。頭上に乱舞する敵機も、初めは恐怖の悪鬼の形想だつたが、いつかレヴユーの踊子のように眺められてきた。真昼の午後一時、底抜けの大陸の青空だというのに、このくらいたそがれのような暗さ。すると私の耳に、聴き覚えのある誰かの声がきこえる。はてと思うと、私を呼ぶそれは母の声だつた。

「御飯だよう、お帰り」

あゝ、と答えた私の眼に、うろこ雲はるかな故郷の夕焼空が展がる。そこにきつぜんと立つ楠の大樹、幼い私はこの木の枝から落ちて、たわしの水をのまされたものだ。すると今度は別の声がきこえた。それは、からからと笑つている。どこかの酒場の女の声だ、するとそれにオーバーラップして抜け出るように白い女のうなじがくつきりと浮かび上る。ぴかりと光つた長襦袢の黒襟、と見るまに妻の白い顔がそれにかぶつてクローズアップされる。なんという凍るようなその白い顔、このときから私の足の爪さきは、氷の中に指先をつゝこんだような疼痛を加えはじめる。じりじり、じりじり盤石の鉄板が、いくら石で支え鉄柱でさゝえてものしかゝるように、それは寸分の狂いもなく、わが身に迫る。あゝいたい、くるしい、なんという厭な酷薄そのものゝ様なこの冷たさ、私は空間に何かを求めるように、双手を振る、川とんぼの羽のようなあえない、それは足掻きとも感じるか、この抵抗は根かぎりのものだ。すると不意に、私の身体はエレーベターに乗せられたように宙に動きはじめる、上るのか、下りるのか、それはわからないが、無限の不快さだ。エレベーターが上昇して止る一瞬、横隔膜を逆にするようなイヤな、肉体的ショックを誰でもが感じることだろうが、あれが無限につゞくのだ。息が詰る、のどが塞る「窓を、窓をあけろ」と私はどなる。だが、誰一人やつては来ない。無限の空間にさらされた、凍りつくような風も光りもない寂寥孤独。やがて青い、真青なものが、光るオーロラの一本のように顔の上にするすると下りはじめた、と思うまに鳥羽玉の果知れぬ闇が一気にきた。冷たい、さむい、大地のなんという厳しい暗さ、死の痛苦はこのくらいの冷たさしかない。私の経験では、これが死なのである。

死刑囚は、電機椅子についたその五秒間に、その人間生涯のすべてを脳裡に眺めるというが、これは事実だ。ワンカットづつのフラッシュの連続、それを書き綴ればトルストイの長編より長くなることは請合である。

川柳の句会も出て、川柳がいくらでも名句になつて飛出してくる。この一瞬もあつたが、意識を失う寸前は、しかし得もいえぬ混沌がくる。吸いこみのいゝ粘膜のぬめりのなかに、ずいと引入れるような、一種不可解な感触。これはもはや不快ではない。

私は隣りの主人が、やがて今エレベーターに乗つているところだと悟つた。天国への上昇か、地獄への下降か。とにかくいたゝまれず私は立つた。

「大きな声でみんな、お経を唱えてあげなさい」

暗然たる思いで私は外に出たが、そこに寒月が、よみじの象徴のように蒼く光つて印象的だつた。

主人が亡くなつたその朝、家の今年八十四になるおばあさんに、私はしみじみとこういつたものである。

「おばあさん、年寄だから若いからということで、死ぬ順序は決して定つているといえませんよ。むしろ遅く死ぬようになつている若い者の方が、死ぬ機会が多いんです。車に乗つたり、けんかをしたり、毎日の仕事そのものまでが一寸さきはヤミです。その点おばあさんはいゝですよ、じつと畳の上で仏さまを拝んで天命の尽きるのを待つていられるんですから、随つて危険の度合は少い、貴方には倖せな毎日ですよ」

一路集

二十才代玉砕するよな呑みつ振り　花団子
只歩くだけで楽しい二十才代　白水
今少し独りでいたい二十才代　寛虚
馬鹿力見せびらかした二十才代　夜潮
老人へ席をゆずらぬ二十才代　東岸子
戦争が奪つた僕の二十才代　雲平
二十才代女将に軽う丸められ　圭水
成年に達したと云う髪を分け　夢介
二十才代父の思想について来ず　良坊
菜の花も山もセンチに見える歳　成人
二十才代矢張り母に味方する　朝気
二十才代の若さ修道院に生き　芳風
もう次の恋をしている二十才代　水堂
彼が飲むから俺も飲も二十才代　寿利庵
筋肉がびく〳〵〳〵と二十才代　一簞
フアツションショウが魅力の廿才代　鉄児
何見てもおかしかつたは二十才代　風の子
二十才代父に云えない借があり　光郎
二十才代どうし産制知つている　一恒
二十才代ノートブックの恋となり　和友
老らくの恋がおかしい二十才代　鳥石
父と座す事を好まぬ二十才代　同
一升を軽う空けたも二十才代　春日
たいていの母を泣かすも二十才代　素百々
二十才代どこもかしこも丸みもち　卓風
二十才代かくてしおきたい人が出来　初甫
我儘も自由主義なり二十才代　満年
二十才代ますます父の肩に似て　トン坊
二十才代親の意見へ遠ざかり　直人

無理と云う事を知らない廿才代　牧人
美しき嘘にも剛れた二十才代　秋雄
鼻の低い事も気になる二十才代　しげを
メーデーの先頭切つた二十才代　十九平
さかずきはしんきくさいと二十才代　粗粒
二十才代ハイと云えない息子を案じ　九呂平
ババアです等と芸妓の二十才代　古心
山吹きの花にも似たる二十才代　九里三
ママ事のような暮しも二十才代　太路
再軍備人事でない二十才代　弘道
佳・二十才代ひげと云うのをつまんで見　鮎美
佳・二十才代煙突男も買つて出る　井蛙
佳・知らぬとは仲々云わぬ廿才代　文庫
佳・給料日までが待てないはたち代　正郎
佳・瀬を登る若鮎のごと二十才代　香林
人・胃腸から苦情飛び出す二十才代　万吉
地・悪友の方が楽しい二十才代　草一郎
天・二十才代出雲の神の知らぬ間に　山雨楼

二十才代

土井文蝶選

税務署の汚職へならぶ二十才代　雅楽太
遊べるだけ遊んで居たい二十才代　黒天子
何となく反撥したい二十才代　南天
二十才代頃の写真を母は見せ　鶏声
剣さげてお馬に乗つた二十才代　昭童
恐い物知らずが恐い二十才代　葉光
あてもなく今日も出て行く二十才代　三林坊
口だけが一人前の二十才代　藤波
青雲を夢に旅立つ二十才代　とよ
愛の巣の設計今日も二十才代　雄声
廿才代の娘に鼻先であしらわれ　ひか平
唇を噛んで泣いたも二十才代　賀峰
ひよろ〳〵と聖書抱えて二十才代　多久志
二十才代やつぱり金だなと思い　同
鉢巻を締めて力んだ二十才代　山花
そのうちに何とかなると二十才代　代仕男
親の威をまだかりたがる二十才代　雄々

ヒステリー

黒川紫香選

宅からの電話がヒスの名に辱ぢず　直人
うからかと話もならぬヒステリー　山花
ヒステリー今日も茶碗が一つへり　昭童
子供等を連れて遠のくヒス発作　とよ
ヒステリー五月の空が肢しくて　花団子
令夫人ヒスの気配もない社交　万古
ヒステリー気味なで寄道せず帰り　粗粒

ヒステリー納つた頃戻つて来　東岸子
美人系なれどヒス系あるらしく　満年
ヒステリー静まる瀬戸物屋へ走り　不二
ヒステリー女中部屋から見つめてる　良坊
ヒステリー昔の夢のあとけなく　和友
今度来た女房やつぱりヒステリー　一恒
弁解をすればするだけ度があがり　ひでを
ヒステリーネクタイでつこしめつける　風の子
ヒステリー夫の良さも知つて居り　雅楽太
何不足ない身で今日もヒステリー　別城
ヒステリー今夜は隣派手にやり　ひか平
ヒステリー明日の花見がよいになり　黒天子
ヒステリー今朝はみけんにきずがあり　素百々
壁一重お隣からのヒステリー　十悟
涙など見せずに妻はヒステリー　秀敏
ヒステリーの気配に子供抱いて出る　寿利庵
ヒステリー朝賢妻で見送られ　秋雄
泣き出したのでヒステリーもう終り　トン坊
見るものが皆腹が立つヒステリー　夢介
ヒステリーあるこは見えぬ薄化粧　喜久治
ヒステリー花が邪慳に活けられる　翠露
ヒステリーへもう残業で押しきれず　香林
ヒステリーリンゴの皮はむきません　三林坊
婦長さんもやつぱり軽いヒスを持ち　初甫
投げるものなくしてヒスは家を出る　満佐志
奥さんのヒスへ中将湯を酌み　十九平
奥さんのヒス心得て逆らはず　葉光
ヒステリーお客様には愛想よし　古竹
重役になり奥さんはヒスになり　卓風

押売も入りかねてるヒステリー

油ぎる夫へ少しヒス気分　文庫
わめくだけわめきヒステリーほつこかれ　太路
電話室ヒステリックな声漏れる　鶏声
ヒステリー派手に茶碗の割れる音　牧人
ヒステリー男を弱いものにする　代仕男
ヒスの待つ宅へ深夜の高級車　春日
腕時計ヒスには一寸大きすぎ　弘朗
看護婦の美し過ぎてヒスられる　光郎
ヒス今日は御機嫌らしい御買物　雄声
社長にも一つの悩み夫人ヒス　雲平
ヒステリーカメラのピント狂わせる　正郎

近づいて来るスリッパがヒスの音　九呂平
鎮静剤飲んでヒステリーまだ続き　いさむ
保険屋もいそいで去んだヒステリー　雄々
ヒステリーお茶の点前はたしかなり　牛歩
上草履ヒステリーとは思われず　水客
家附きのヒス口数の多いこと　草一郎
ヒスと云う病気ですよと医者笑い　天保銭
夜があけて見ればケロリとしてるヒス　鉄児
デパートの品でおさまるヒステリー　文庫
時計打つたんびに募るヒステリー　九呂平
ヒステリー飯を炊いたり炊かなんだり　夜潮

まだ何か疑つている妻のヒス　一の字
かと云うて機嫌をとれば尚ヒスリ　一策
死ねばいゝんでしようこヒス必死　潮花
ヒステリー浮気な夫にしてしまい　直人
外科にまでお世話になつたヒステリー　しげむ
ヒステリー金目のものはよけて割り　紫朗
会社まで乗りこんで来たヒステリー　賀峰
ヒステリー今度は死んでやると云い　多久志
ヒステリー静かになつて二時からうち　同
ヒステリー亭主は腕を組むばかり　山雨楼
皿割つてやつておさまるヒステリー　山雨楼

ヒステリー長女は洗濯物を干し　鮎美
お芝居も洋画も知らずヒステリー　同
猫こゝろ得た顔でいる　水客
五・欲しいものみんな揃えてヒステリー　水堂
五・本妻も二号も同じ型のヒス　初甫
五・ヒステリー自分のヒスに気付いてず　圭水
五・ヒステリー治れば馬鹿に陽気なり　白水
人・本妻に直つてからのヒステリー　鳥石
地・母に似たヒス母親がもて余し　弘道
天・ヒステリーお掃除だけはゆきとどき　秋香
軸・御近所とつきあいもせずヒステリー　紫香

柳・界・展・望

▼本社七月句会は七月十日午後五時から「川雑川柳まつり」を賑々しく挙行する。会場は天王寺区下寺町二丁目市バス停前大覚寺（光明寺北隣）なお、全国の川雑各支部及川雑系句会に於ても同日全国一斉に「川雑川柳まつり」句会を開催、各地それ〴〵多彩な句筵開催につき、随時最寄りの各会に来加されたい。新人はもとより、他社の柳人の来会を歓迎する（別稿句会案内参照）▼南区医師会文化部杏林川柳会は六月十五日午後七時半から生々庵居で開催。▼南海電鉄川柳会は六月二十一日午後六時半から粉浜親和寮で六月句会開催。▼故荒木哲水氏一周忌句会は川雑梅田支部、同池田支部、同大鉄局支部共催の下に、六月二十七日午前十一時から阪急電鉄宝塚保養所で開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑淀川支部句会（大阪市）は七月六日午後六時から東淀川区三津屋北通四の二九の武部香林居で開催される。兼題「メーター」「老眼」「女の子」の三題▼川雑梅田支部（大阪市）七月例会は三日午後五時から阪神ビル三階会議室で開催、兼題「街角」「汗かき」「すだれ」▼みをつくし川柳会（大阪市）は七月十三日午後六時から天王寺中学校で七月句会開催。兼題「年寄の冷水」「ひやかし」の二題。▼川雑備前支部（岡山県）は六月五日午後六時から吉水駅長宿舎で六月句会開催。▼川雑大原支部（岡山県）では大原町合併祝賀支部発足記念句会を五月三十日同町青美居に於て開催された。▼川雑堺支部句会（堺市）は六月十九日午後六時から摩天郎居で六月例会開催。▼大阪市交通局川柳会は六月十六日午後五時から同病院サンルームで六月句会開催。▼川雑篠山支部（兵庫県）は六月六日午後六時から無鬼居で六月句会開催▼川雑貴生川支部句会（滋賀県）は六月四日美秋居に於て六月句会開催。本社から北川春巣氏出席▼広島川柳会六月第一例会は六月五日午後六時から広島貿易館に於て開催された。▼川雑岡山市内グループ川柳句会は六月八日午後六時から日赤岡山支部で開催。▼川雑弓削支部（岡山県）の六月例会は六月五日に戸川商店で開催された▼川雑弓削支部（岡山県）では九月十九日に町村合併記念西日本川柳大会を開催することになつた募集句其他詳細は後報▼北洋博協賛親善川柳大会が函館川柳団、青森県川柳連盟共催で、七月廿五日午後一時から函館市末広町末広倶楽部に於て開催される。▼うめだ番傘川柳会から句集うめだ二十八年版が四月末刊行された。非売品▼今度岡山県弓削町で、弓削川柳社後援で駅前に建つ路郎師の「おれに似よ」の句碑その儘の焼印で、川柳せんべいが発売される由、さすがに川柳町だけに、昨年の大会を機会に設置掲示板も町村合併区域拡張に伴い十三ヶ所に増設されているとの事。▼久保和友氏（滋賀県）は五月二十八日から五日間別府から北九州を旅行され「湯けむりにむせてる雨になやまされ」の句信を寄せられた。▼増本翠露氏（大阪市）は六月二日本社来訪、後兵庫県郡家町の外語大学海の家殿営の為の出張、同地より「小役人身分相応の旅をする」の句信を寄せられた▼杉森真沙魚氏は病気加療の為め大阪市石ヶ辻愛国病院へ入院一日も早く全快を祈る。▼故上田芝有氏（大阪市）の一周忌法要が六月十日大阪市四天王寺本坊で開催された。▼上田正夫氏は大阪市大淀区大仁東一ノ一八に移られた。▼川上日車氏は滋賀県蒲生郡武佐村小野医院内に転住された。▼川端柳風氏の住居は今回市制施行に伴い鹿児島県出水市武本竹之山と称呼変更。

（摩）

正誤

前号十九頁三段三五行目、山雨楼氏の句、仕合せはたのしみの誤り。

平維盛

富士野鞍馬

治承三年（一一七九）重盛がなくなつてからの平家は、衰運に向つていたといえよう。頼朝、義仲等の源氏の勢が、東国で増大し、日々有力になつていた。

治承四年（一一八〇）九月十八日、清盛の命で、平維盛（二十三才）を大将とする、三万騎の平家軍は、薩摩守忠度を副将として、福原（神戸）を出立して、頼朝を討つべく、東へ向つた。翌日は京都に着き、勢を整えて、十月十六日には、騎河国清見関（興津）へ着、その途中で各地の兵も加つて、総勢は、七万余騎となり、先陣は、蒲原から、富士川の手前まで進んでいた。

一方頼朝勢は、甲斐や信濃の源氏も加つて、その勢二十万騎といわれ、騎河の黄瀬川まで進み、富士川を挟んで対陣して、二十四日の卯の刻（午前六時）矢合せをしようと定めたが、その前夜に、平家軍は、水鳥の羽音に驚いて逃げたのであつた。

「平家物語」は

「その夜の夜半ばかり、富士の沼にいくらもありける水鳥どもが、何にかは驚きたりけむ、一度にばつと立ちける羽音の、雷、大風などのように聞えければ、平家の兵ども「あはや源氏の大勢の向うたるは、昨日斉藤別当が申しつるように、甲斐、信濃の源氏等、富士の裾より搦手へや廻り候ふらむ。敵何十万騎かあるらむ。取り籠められてはかなふまじ。こゝをば落ちて、尾張川洲股を防げや」とて、取るものも取りあへず、われ先われ先にとぞ落ち行きける。あまりにあわて騒いで、弓取る者は矢を知らず、矢を取るものは弓を知らず、わが馬には人乗り、人の馬にはわれ乗り、繋いだる馬に乗つて馳すれば、株（くい）を廻ること限りなし。その辺近き宿々より、遊君遊女ども召し集め、遊び酒宴しけるが、或は首蹴われ、或は腰踏み折られて、をめき叫ぶ事おびただし。」

と、その様を書いている。それで川柳は、

水鳥の加勢赤旗追ちらし　（タル一一四）

富士川はほんの赤恥かいた　（〃　四三）

とこ

平家方寝耳に水の鳥で逃げ　（〃　九三）

ぬかぬ太刀とは富士川でい　（〃　二七）

ひはじめ

等と詠んでいる。まさに戦わずして逃げたのであつた。またその時呼ばれていた遊女共の狼狽を、

八陣の出口に迷ふ白拍子　（拾　五）

富士川で三絃を折る白拍子　（タル　三六）

（拾）

と詠んでいる。

源氏方では、約束通り、二十四日の卯の刻に押寄せて、トキの声を三度あげたが、何の答えもないので、人をやつて見たら、みんな逃げたあとであつた。

腹をかかえて富士川を源氏越し　（タル四一）

それで、頼朝軍は追わずに鎌倉へ帰つた。

十一月八日に、維盛等は福原へ帰つたが、祖父清盛は大怒りで、維盛を鬼界が島へ流すともいつたが、十日には、維盛右近衛中将に昇進した。それを、

「こはされば、何の勧賞ぞやとぞ、人々ささやきあはれける。」

と「平語」に書かれている。その年十二月二十八日、清盛の四男重衡は、奈良の東大寺、興福寺等を焼討した。

重衡は大きな仏火にくべる　（タル十七）

と川柳に作られている。

翌治承五年（一一八一）一月二十七日、宗盛が、再び東へ向うという時、清盛は発病して、閏二月二日なくなつた。

壽永二年（一一八三）四月十七日、又々、三位中将になつた維盛を大将とし、忠度等を副将として、十万余騎の大軍で、義仲追討に、北国へ向つたが、富山縣と石川縣の境の砥並山で、義仲軍に、三方から夜襲をうけ、火牛の妙計に、さんざん負けて、大部分の将兵は、倶利伽羅谷へ落ちて大敗した。

「平家の大勢、後の倶利伽羅が谷へ、われ先にとぞ落ち行きける。先に落したる者の見えねば、この谷の底にも道のあるにこそとて、親落せば子も落し、兄落せば弟も落し、主落せば家の子郎党も続きけり。馬には人、人には馬、落ちて重なり、さばかり深き谷一つを、平家の勢七万騎で埋めたりける。」

と、「平家物語」にあるが、七万騎は大げさである。別な本には死者一万八千余人とある。川柳では、火牛（牛の角に松明をつけておどりこませる）の妙計を詠み、

倶利伽羅の火焔牛角で落を

武田薬品

熟眠できますか？

不眠症・神経性不眠症・神経衰弱・ヒステリーの方に

カルモチン錠

80錠（80円）・100錠（200円）

取り　（タル一六六）
倶利伽羅で劔もほろろの平
家勢　（〃　九六）
あなむざんやな兜の中の牛
の角　（〃一一一）

そして、義仲軍は、どんどん追撃し、維盛は、五月下旬に京都へ逃げ帰つた。その時には総勢二万余騎に減つていた。

すぐにも、義仲が都へ押寄せてくるというので、宗盛以下平家一門は、安徳帝、建礼門院を奉じて、西海へ落ちたのであつた。

そりや木曾が来たとでんぐ
りかへす也　（拾　タル十八五）

この時、清盛の異母弟、池の頼盛は一人都に残つた。この人は、母のよしみで、頼朝と通じていたのであつた。

一門のきなか池殿落のこり
（タル八七）

という川柳がある。

じだらくにどや〳〵にげる
都落　（タル二四）

平家の都落は、壽永二年（一一八三）七月二十五日で、維盛は、妻と子（男十才女八才）を京都に残して、共に西へ落ちたが、屋島で雲隠れして、高野山へ入り、僧となり、淨圓と名乘つて、壽永三年三月二十八日、二十七才で、熊野の海に入水して果てた。

これを大和のすし屋の聟になつたように、淨るりに作られているので、

維盛がこはだのとげをお里
抜き　（タル一五七）

という、芝居を詠んだ句もある。

維盛の子六代は、母と共に洛西大覚寺にかくれていたが、北條時政に捕えられ、鎌倉へ護送の途中、千本松原（沼津）で斬られようとする時、文覚上人が、頼朝からの書狀を見せて、助けて、預り、京都の高雄に置いて、文治五年（一一八九）十六才で出家、三位禪師といつたが、頼朝も死に、頼家になつてから、又召捕られ、鎌倉への途、相模の田越川で、建仁二年（一二〇二）三十才で斬られた。「平家物語」は

「三位禪師斬られて後平家の子
孫は永く絶えにけり」

と結んでいる。

尙維盛の弟五人、清経は西国で、師盛は一の谷で、資盛、有盛、忠房は檀の浦で、いずれも戰死した。

折々小感

日置文郎

○小野十三郎は「これからの詩は、韻文で書かれたこれまでの詩のように、ちよつとした思いつきとか、言葉のうわべの音楽性にたよつていては駄目だ」と朝日（童詩の作り方）に書いている。川柳についても同じことが云えるのではないかと思つた。

○德富蘇峰は「牛は牛づれ馬は馬づれと云うが、人間も亦人間づれであつて如何に犬や猫を愛して見ても限りがある。人間は人間に依つて又人間の為に又人間と共に其の生活の意義を見出し、その生存の目的を全うするものである。……要するに人間は人間万能と云つて差支えあるまい」と読売に書いている。この人間を見つめ、讃え、導く川柳家は幸なるかな。

○自由律俳句とは一口に云えば一行詩である。と自由律作家は云う。事実この自由律俳句の一端を探つて見ると、俳句と云うよりもむしろ詩に近いように思う。

○或る小学校の教師が、川柳とは、小学生の作文のようなものだと思つていた。と洩らしていた。川柳を知らないからである。

○けれども私自身の二年間の句帖を繰つて見ると、短冊にでも書いて人に見せるような句が見当らない。恥ずかしいことである。

○先輩から「運命は自己が造るものなることを忘れずに」と云う激励文を貰つた。しかし、事実運命を自己が造り出すことが出来るであろうか。宗教に依ると正しい生活をしていれば、自然幸運が向いて来ると説いているものが多いが、現実に政界の汚職などを見せられては、それも信じ難い。

○闘病の僕がいると云う只一つの理由の為に、幾度か破談になつた妹。それでも何一つ不足を云わずに働き抜いてくれた妹だつた。その働き手の妹を嫁がせてしまつた老父母、今日も朝から鍬をふるつていることであろう。僕は闘わねばならぬ。

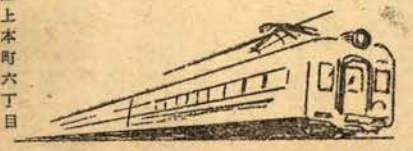
BK放送川柳募集

放送日時　八月十四日午前六時三〇分（第二放送）
課題　「ネオン」
用紙　清水白柳子選
〆切　官製ハガキ　三句以内
投句先　七月末日着便
大阪市東局区内馬場町
大阪中央放送局
「BK川柳の会」

大阪・名古屋・宇治山田を結ぶ
近鉄特急！
大阪一名古屋　2時間55分
大阪一宇治山田　2時間
名古屋一宇治山田　1時間42分

大阪上六発	7.40	8.40	11.40
	14.40	16.40	18.40
名古屋発	8.00	9.00	12.00
	15.00	17.00	19.00
宇治山田発	8.50	9.50	12.50
	15.50	17.50	19.50

座席指定特急券5日前から近鉄案内所で発売



近畿日本鉄道
大阪市天王寺区上本町六丁目

川柳第二教室

戸田古方

三　川柳を作りはじめた人たちへ

何でもやりはじめというものは熱の入るものです。ことに自分の句が抜けはじめて、句会では読み上げられるし、誌上では活字になつてごらんなさい、とてもうれしいものです。

すべり出しが順調にゆくと、はじめの一二年はことによく伸びます。長年やつた人よりもよく抜けてまるで大家にでもなつたような気になるものです。それは目から耳から、入るものがすべて血となり肉となつて行くからです。新鮮なものですから他の人の思いつかなかつたテーマを思いつくこともあります。盲蛇におじない大胆さも手伝います。

ところが数年を経るうちに段々抜けなくなります。いやになつてやめてしまう人の出るのもこの頃です。下手になつたのではありません、抜けなくなつて下手になつたように思うのは自分が進歩したからなのです。自分にはそうとは気がつきません。同じようなものより作句出来ない、他の人の句が非常に上手に見えてくるから余計いやになります。しかしそうなつたのは自分の句に対しても、他人の句に対しても批判する目が出来て来たからなのです。このスランプを突き抜けるには大いに句を読み、大いに教を請わなければなりません。早くこれを突き抜けられる人もあるし、又相当の間苦しむ人もありますが、こんどぬけ始めますと前よりたしかに一進歩を示しています。

こうした山と谷が何んべんもくり返えされてゆくうちに年期が入つて来ます。年期を入れると味とか錆がついて来ます。川柳は一生が修業です。一生のうちに一句でも生命のある句が出来ればと考えながら精進しているのです。

川柳の対象は人事百般、自然もふくめられるのですから、われわれの心が人と自然に溶けて行きます。人間が立派になれば川柳も立派になります。逆に川柳しているうちに人間が立派になるともいえます。

一句を作るためには持ち合せの知識や経験は勿論、可能なかぎりのものをとり入れて整理する必要があります。あらゆるものゝほんとうの姿が身についてくるのです。

四　省略について

川柳の表現は基本的には十七音字ですから無駄なことばは出来るだけつかわないようにしなければなりません。所謂省略の妙が発揮しられるわけです。あまり省略しすぎてもわからなくなるし、といつて何もかもいいつくすとたとえ十七音字におさまつたとしても平凡でおもしろくなくなります。ほんとにいゝ省略をするためにはものゝほんとうの姿をよくつかまなければなりません。何もかもわかつた上でなされた省略は余裕があつてすぐれたものです。

前回に引き合いに出しました〝乗りおくれ恨みは時計に八つ当り〟

〝恨み〟をとつて〝乗りおくれとわかり時計に八つ当り〟と直しましたが直接〝恨み〟といわないところにかえつて〝恨み〟の印象は

句をめぐる先生と私

八木摩天郎

路郎先生に、初めて、お目にかゝつて、二十数年、日本柳壇に、その人、在りと知られた麻生先生も、私は正直な所、「あさぶ」と読むのかと思つていた。毎日何回となく、する電話に、あさぶ様ですかと云うと？「あそを」ですと言われたが、お名前はあさぶそれで正しいと思つていた。そして路郎（ぢろう）先生を、「みちを」と読むのかと思つていた。兎に角、その頃は講談倶楽部を毎月面白く、愛読していた私、その頃の選者の先生の顔ぶれは、歌壇は、佐々木信綱、斎藤茂吉、俳壇は、高浜虚子と河東碧梧桐、詩壇は、北原白秋と野口雨情、わが柳壇は、麻生路郎、井上剣花坊の八人の先生で、毎月交互に選をされていたので、お名前は知つて居つた。

公私共先生に御厄介になつた私、思い出深い千本通の、木の繁つた前庭に、ぽつねんと先生の家を守る門燈にかゝれた「あそを」の文字で、僕がまちがつて居つたのを知つた。ベルも、おそる〳〵押して話し込んだ。その頃に作られた

女十八アダリンの夢

が、きやりや東北川柳に転載されていた。この句の生れたのも昭和五年頃であつて私はいつも、その頃をなつかしむのである。

三人が辞へば三人らしくなり

先生の名句として全国に知られているこの句の生れたのも、あの頃であつた。「らしくなり」の下五に、心曳かれた私。堺大浜の「丸万」と云う旅館で、先生と田中喜太郎君と私の三人が、明滅する燈台の灯影ほのぐらきところで杯を手にしたのも、もう二十数年の昔になつてしまつた。三人の一人は「旅人」の句集の主、不朽の金字塔を樹立された、今をときめく、日本柳壇の巨匠、麻生先生の若きお姿である。田中君は、今は和泉町教育委員として尽し、大分財産も、こしらえたらしい。歳月は流れ、お互に、細雪のような、雪を戴く頭になつても、ビールを傾け、団扇を右手に、コップを左手で波濤のうねりの音を聞いたころのあの句もなつかしい思出である。

燈台の下の丸万夜となり

上機嫌の先生は、団扇に早速揮毫されて、その昔　お角力さんの八角と云う名力士の子孫だと云う、肥えた丸万の女将「八角お艶ちやん」に渡された。軍配ならぬ団扇を貰つた艶ちやんも、おばアちやんになつた。逢う度に、麻生先生は、と先生の事を尋ねる。一度お目にかゝりたいといつも言つて、その頃をなつかしむのである。

春は過ぎ夏は来たけど片思ひ

強くなります。これも省略です。

〃りんじうと時計みながら手をはなし〃

〃御りんじうですと時計をしまいこみ〃としますと前の句と大分表現がちがつていますが〃時計をしまいこみ〃の中には形だけ時計をみていたことも、死者の脈をみていた手をはなしたことも含まれていますし、〃御りんじうです〃と医者自身のことばを入れましたのでその場の有様が浮んで来ます。実際はまだ時計をもつていたかもしれませんがあまり報告にすぎない方が句としては上々です。

もう一つ〃新所帯隣の時計あてにして〃と

〃いゝ音は隣の時計壁一重〃をくらべてあとの方には新所帯とはいつてないので新所帯でないとの理くつが出るかもしれませんが〃いゝ音〃ときくところに壁一重のあまり豊でない生活とはいえくつたくを感じない生活のたのしさを感じさせて新所帯のような楽しさも充分に含ませ得ることが出来ます、これが描写でありまして〃あてにして〃などはあまりに説明すぎます。芸術の創作は描かなければなりません説明では芸術とはいえません。

〃好敵手積み重ねたりすしの皿〃という句があります。この句は省略されたため句意が不明瞭になつています。一口にいつて積み重ねたすしの皿に注目しますと喰い競べの好敵手かとも見られます。小道具としてすしの皿を見ますと何か別のことで好敵手である二人がたまたま出逢つて友情をあたゝめているとも見えます、そうなればすしであつても徳利であつても差支えなく思われます。も少しどつちかはつきりさせる必要のある一考を要する句です。

〃好敵手勝つたぞというすしの皿〃とでもすれば喰い合いとはつきりわかるし〃好敵手の分も払つたすしの皿〃とすれば友情の句となります。

古川柳に

〃下女の恋日に三度づゝ実を見せ〃

日に三度づつというのは三度の食事のことですが炊事係の下女は思うている男の召使にこの時とばかりスベッシャルサービスをしているのです。いわゆる川柳らしい省略ですが気をつけないと意味の通じない句が出来てしまいます。

例えば「白いきもの」である人物をいゝあらわそうとして「白いきものが……する」といつても白いきものが医者であるかコックであるか、白シャツか浴衣か、ひところよく見かけた朝鮮の人か、そういうことが説明なしにわかるように用意しなければなりません。

〃エロ談義又阿部定の話が出〃

（柳略）

阿部定が何であるかわからなければ何のことやらわかりません。時事をよんだものや歴史を詠んだものゝ中にはこうした不明の省略になつてしまいそうなのが可成あります。

一つの句想がうかんでそれが一句になるまでにへた過程をかきならべて見ましよう。

題　扇風機

想　扇風機をかけつぱなしにして本を読んでいた時に急に風が吹いているのに気がついて

冷風が来て扇風機オフにする（オフ、止める）

風があつたんだなと扇風機オフにする

扇風機オフタ風もすんだらし

扇風機オフそよ風が吹いて来た

吹いて来て扇風機オフにする

吹いてるんで扇風機オフにする

○吹いてたんだ扇風機オフにする

最後から二番目と最後とは進行形と継続を示す現在完了のちがいです。最後の句になつた時はじめて句巻に清書しました。

ことばを選ぶのは実際に数多くあたらぬとなかなかうまくゆきません。それだけ力の入れ甲斐のあるもので単純の力というかそういう威力を発見してわれながら驚くことすらあります。

淡路島を眺めて、風鈴の音を聞きつゝ、浴衣がけになつた先生と私、摩天郎と云えば、恋の句がよかろうと、色紙に、僕の似顔を書いて早速、

初夏のそれもよかりき恋に生き

と書いて下さつた。けれど「摩天郎」の為書のある此の家宝も、その後焼失したのは惜みても惜しき極みである。私が先生の御宅へ伺つた時、万天下弘しと雖、客を脊中に商売して儲けている店が堺市にタツタ一軒ある。銭も後ろ向いたまゝ受取る餅屋があるとお話したら、翌月の「川柳雑誌」に、

大寺にて

客を脊に餅賣れること売れること

の巻頭句が掲載された。うまいなア、句も餅も、どちらも……うまいと思つた。

田中君と先生と私、先生のラシヤ机を囲んで、売店から、田中君が取り寄せた南京豆を、しやぶりながら、話して雑談に、首の話に夜を過して、大笑いして楽しんだ頃、

南京豆をたべたべ首の飛ぶ話

を作句せられた。その先生が、病臥されて、入院されたが、どうしても、先生の御判が無ければ、物一つも、買えないので、いつも先生の御決裁を得るために病室へ訪ねた。

病臥して居るに電話の印鑑の

と云う句が「川柳雑誌」に表われて、厚ケ間敷い私も恐縮せざるを得なかつた。

御病気が癒つた先生と私は、堺の町を一緒に歩いた。そして盃を手にした。

酒とろりとろり大空の心かも

秋の青空を眺めて、先生ととろ〳〵と上機嫌で歩いた僕は先生の

人妻のあまりに長き袂なる

と云う、名句を味わいつゝ歩んだ。それから十数年を経て、短冊展や句集「旅人」の事で、先生と歩くときも、

恋の畏あの眼だろうか眼だろうか

と云う千本通り時代をなつかしんだものである。

最近先生の御宅へ「蛇の如く巻きついて、或意味において執念ぶかく」と生々庵博士の云われたように、仕事の事や、編輯のことで伺つた時に映画「君の名は」の話を、先生や葭乃先生に、話したら、早速葭乃先生は

「君の名は」を見た話し手は五十過ぎ

の句をものされ、摩天郎も若いところがあると、両先生に笑われた。

この二月のこと、先生と白浜へ遊びに行つて　昌坊君の喜楽荘で先生と、楽焼に染筆して、遊んだ。早速翌月の「川柳雑誌」に

樂焼へへたくそ同志仲がよし

と掲載されて、呵々大笑した。そばで「川柳雑誌」を見て居た愚妻も大笑い、これが、ほんとの嘘大笑だつた。

いのちある句を創れ

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社五月句会（大阪市）

五月八日　午後六時　於　光明寺

若葉薫る五月の本社句会は、夜の六時と雖、陽なお高く花の如く、美しさ新緑に、光明寺はさながら幽邃境にあるが如く、日落ちては、ほろほろ鳥に、此処昔、定家郷の夕陽ケ丘さながらのこの環境とこの好シーズンその上一ヶ月振の恩師の警咳に接せんとする人々とて、開会前より多数来集する有様であつた。開会に続いて、水谷鮎美氏の句評は「浮世さまざま」と題して、蘇堂、愁夢、幻詩、柾風、竹馬谷水、代仕男、牧人の諸氏の句に短評を加え次いで路郎師は多数の見舞状に、感謝され、われらの「川柳雑誌」は我々の手でと、各人互に編集に協力すべきであると望まれ、なお、課題吟天地人制の在り方について諄々として説かれ、後、席題、兼題の披講に入り当夜の不朽洞賞優勝カップは山本葉光氏が把握した。閉会九時、（摩）

出席者＝路郎・雄声・凡九郎・都詩子・一の字・葉光・文秋・一ン十・淡舟・和友・雅巣・ひろし・一瓢・潮花・香林・一朗・水堂・省三・豆秋・静馬・丁路・十悟・水客・文蝶・花村・一夜・悦朗・久子・幸雄・紫香・いさむ・摩天郎・蜂呂・賀峰・多久志・正斗・万楽・翠露・六竜子・景和・古方・春巣・三司・竹荘・一三夫・文夫・京一楼・白水・達也・貴山・栞・いわを・鮎美・生々庵・白柳子・葭乃・梨里

兼題「首相」　麻生路郎選

招かざる客は首相を休ませず　香林
首相また新装開店するつもり　白水
よつぽどのきげんカメラへ首相立ち　葉光
首相ひとり汚職の渦の外に佇ち　一ン十
民主々義になつて首相もやりにくし　しげお
草に寝て首相の苦労思いやり　丁路
首相ともなれば知らぬで押し通せ　圭三
官邸で首相居留守をして眠る　いわを
答弁へ首相邪魔くさそうに立ち　淡舟
首相の大嫌いなものに労働歌　正斗
首相邸の犬になりたい人もあり　香林
鶴の一声押しも押されもせぬ首相　栞
首相今日陛下の横でよく笑い　賀峯
斜陽とは云えど首相は首相なり　賀峯
停年もなく替り手もなく首相　水客
首相にも尻尾があつた時事漫画　一の字
地下足袋にさして首相の似顔描く　水客
末席の野党へ一べつする首相　紫香
首相とはゆかぬまでもと思う慾　賀峯
てにをはも首相となれば気を使い　白柳子
失言をしたで首相へ記者忙わし　一の字
もう頑固では通せぬと首相知り　賀峯
生殺与奪の権を首相は満喫し　香林
模範工首相に肩を叩かれる　一の字
首相ともなれば野次など聞き流し　いさむ
答弁に窮する首相の咳払い　ひろし
あれこれと騒がす首相の政治力　竹荘
カメラマン首相の笑顔見逃さず　竹荘
写真班そこのけ〳〵首相が通る　春巣
首相ついおこらす野次に引つかゝり　春巣
カメラマン首相に注文つけている　雅楽太
フラッシュへ首相の顔がちさゆがみ　春巣
カリカチュアになる太い眉首相持ち　春巣
国民は耐乏せよと云う首相　雄声
首相から貰つた犬と写される　春巣
歩ばかりの首相持駒欲しいなり　静馬
アクセントまで真似られている首相　雄声
日本の首相やつぱり保守で良し　白水
国宝を前に首相のバラはゆれ　貴山
殺される覚悟も出来てゐる首相
さて誰も来ぬと寂しい元首相

兼題「平和」　麻生路郎選

跡始末我が党でとは嗤わせる　へとち
第九条がチヤイされている平和　豆秋
平和論唱えながらも平和論　一朗
引揚げて平和な村が物足りず　春巣
手が切れて平和な朝のお茶の味　多久志
家庭の平和みんな金でした　栞
夕食の影が平和な老夫婦　一夜
ダンスダンスこれで平和が来たつもり　栞
米櫃へ外米を持ち越す平和　一瓢
平和な家の猫なんとなく女らし　香林
署名運動だけで平和は訪れず　雄声
平和とは名のみ戦争の音がする　都詩子
秘密のない生活お櫚をつけて待ち　香林
平和論わが家に右派と左派があり　一三夫
薄給が平和な家庭もちつづけ　季賛
くり返す歴史へ平和の短かすぎ　栞
夢の様な平和へデモの旗をふり　多久志
平和日本に逆ろう玩具買いたがり　万楽
夢見ても平和は高いとこにあり　和友
平和憲法陰に進軍ラッパ鳴る　三司
悲しみに耐えて平和を待ちあぐる　淡舟
家庭平和嫁と姑ゆずり合い　ひろし
東洋平和信じて銃をとつた日よ　正斗
原爆がのしかゝつてゐる平和　静馬
カウンター味気のう聞く平和論　文蝶
死の灰が平和な村をあわてさせ　紫香
なんの平和か軍艦借る話　文蝶
すき焼へこんな平和がある吾が家　文夫
串カツを終年に平和論をやり　竹荘
美人嫁き社内の平和よみがえり　一ン十
男の子ばかりで母の平和論　宇ン柳
妻に負け夫に負けて円うゆき　省三
平和政策裏を返すと茸雲　久子
旅客機の下は平和な鍬をもち　万楽
煙一すじ山は平和に明け暮れる　蜂呂
ひと儲けする気平和な村をすて　潮花
鳩なにも言わず平和の使する　同
平和とは五段百姓の牛が啼く　一瓢
弾みがく友もやつぱり平和論　兼比羅
降職が平和な家庭あわてさせ　季賛
強いもの勝ちの平和に逆えず　葉光

兼題「並木」　西尾選

暫らくは並木のつゞく配達夫　万楽
引揚に我が家が見える松並木　一夜
富士見えて飛脚来そうな並木道　紫香
捗らぬ道は桜が咲き続き　宇柳
惚土重来並木は芽ぶき初めたり　一瓢
柳並木も廓に近いしなをする　同
其の汗をふけと並木を風が吹き　兼比羅
五月雨に並木も煙り恋も濡れ　都詩子
並木みちこゝで淋しくなる別れ　摩天郎

信心の並木は青い風があり　水客
遠足の帰り並木の長すぎる　花村
平作があそう夜明けの並木道　鮎美
松並木下駄の軽さも久しぶり　一の字
アベックがアベックに逢う並木道　竹荘
冬枯の並木の道に見た孤独　久子
松並木ほどよく月が引つかゝり　水客
葉桜の並木女の手が温くし　豆秋
パトロール曙にのぼる並木道　和友
マロニエの並木の下の乳母車　葉光
並木まで来て大胆な女なり　淡舟
恋に破れた並木の道の月蒼く　鮎美
独り行く並木の道にある思案　凡九郎
灯がともり並木へ銀の雨がふる　豆秋
ステッキで指すものがある並木道　春巣
白樺の並木に旅の雨を見る　翠露
並木路へ来ればまだある明治調　省三
松並木が唯一の名所という新市　栞

兼題「片思い」　友淵貴山選

片思い後ろ姿を見て暮し　鮎美
酔いつぶれ土曜の夜の片思い　同
片思いぼたんの多い里に住み　水客
片思い鏡台だけが知つて居り　多久志
新調で一目見て来る片思い　紫香
蝙蝠の行方見てゐる片思い　栞
出稼ぎが置いて帰つた片思い　十悟
自信だけついてしまつた片思い　和友
片恋の背広は酒のしみに濡れ　一の字
片思いだつせと酒にさゝやかれ　豆秋
片思い彼女の知つた事でなし　文蝶
片思いその弟と仲が良し　鮎美
片思い今日から僕は希望かえ　季賛
一度だけ話して見たい片思い　悦朗
惜しみなくチップを出して片思い　丁路
映画観に誘そてもくれぬ片思い　豆秋
片思い女はこうも直剣な　文夫
片思い幾たび春はめぐれども　多久志
片思い応援団長髭を剃る　一三夫
ペンネーム理由語らず片思い　花村
四十度の熱が下らぬ片思い　豆秋
片思いのくせに三杯たいらげる　淡舟
親類をみんな集めた片思い　文夫
片思いのまゝ漫才の名コンビ　万楽
片思いの間はうたができました　古方
片思いたゞ石ころの帰り道　一の字
片思いであつたといわぬ父の恋　栞
御免ねと嫁いで行かれた片思い　一夜
片思いネクタイ部とは高うつき　貴山

席題「鯉のぼり」　丸尾潮花選

絵本より欲しいおまけの鯉のぼり　静馬
お手製の鯉を喜ぶ子に育て　都詩子
小さくとも片親だけの鯉のぼり　紫香
鯉のぼりの影が写つている二階　賀峰
鯉のぼりもガスを入れて欲しゆうなり　白水
午后の陽へ影が大きい鯉のぼり　いさむ
馬車馬の腹に巻かれた鯉のぼり　省三
鯉のぼりビキニの灰を知つてそう　葉光
鯉のぼり国のおやぢとやつて来る　六竜子
お隣りへ気兼ねで出した鯉のぼり　賀峯
僕とこも男が居るぞ鯉のぼり　雅巣
鯉のぼり白壁ずつと続く街　和友
アパートに住んで小さな鯉のぼり　久子
何処にあつたのか長屋の鯉のぼり　蜂呂
産声へ今年は欲しい鯉のぼり　紫香
鯉幟市営住宅ならび立つ　水客
腹へ呑む煙社宅の鯉のぼり　京一楼
鯉のぼり尻尾が天気かえるなり　栞
背のびして両手の先の鯉幟　水客
極道になるとも知らぬ鯉幟　水堂
労資共々負けず嫌いな鯉のぼり　鮎美
鯉のぼり立てゝ家賃は滞らし　水堂
病める児の視界へせめて鯉のぼり　文夫
子の眼には親子と見える鯉のぼり　春巣
未亡人で通してみせる鯉のぼり　万楽
妾宅は竿が折れそな鯉のぼり　潮花

席題「黙否権」　須崎豆秋選

黙否権眼鏡かけたりはずしたり　香林
眼に涙ためて女の黙否権　潮花
刑事部屋うどんだけ食い黙否権　いさむ
黙否権も南京虫に音をあげる　淡舟
黙否権莫ばかりをやけに喫い　雄声
聞くだけは聞いて居ります黙否権　潮花
友情へどうでもなれと黙否権　和友
黙否権三日つゞいて仲直り　竹荘
黙否権やくざの義理を立てゝいる　いさむ
意見する父へアプレの黙否権　久子
黙否権やつぱり夫が負けて出る　一三夫
差入れは皆平らげた黙否権　文蝶
弁護士に頼り切つてる黙否権　水堂
黙否権一本喫えと刑事出し　貴山
黙否権煙草の灰が落ちかゝり　香林
坊やにもあつた小さい黙否権　雄声
黙否権刑事の煙草喫うてゐる　紫香
こわやこわやこのちんぴらの黙否権　古方
黙否権ふくろが鳴いた夜のしじま　鮎美

席題「蠅」　長谷川三司選

蠅の出る訳ゴミ箱の蓋をさせ　万楽
蠅ぐらいなんだと神経太いなり　葉光
蠅が出てそろ〳〵夏がくるらしい　多久志
蠅も蚊も居らぬと赤のほめこと　一ン十
蠅取りの競技もあつて文化国　一の字
放心の目が一疋の蠅を追い　久子
蠅一寸思案する様な顔になり　淡舟
蔭膳の蠅をみんなで追いながら　万楽
恋語るのに不粋な蠅が来る　淡舟
意見されてる弱味へ蠅とまり　水堂
魚屋の手練美事に蠅つかむ　一三夫
次の間へ蠅を追うてる丈けの役　水客
せつかちな人やと蠅は思もて居り　凡九郎
飲みかける猪口にとまつたにくい蠅　香林
禿げてゐて此処の主と知つた蠅　白水
蠅一疋仔猫の首へ右左　久子
怒つてるとことは知らず蠅さまり　水堂
蠅位と言つても居れぬ昼寝なり　雄声
蠅を追う馬の尻尾の忙しく　翠露
一疋の蠅へ呼ばれたコック長　竹荘
ゲン燈へ止つた蠅が大写し　一夜
DDT蠅も此頃剛れました　文蝶
蠅たゝきオモチャにして子を叱り　竹荘
新築の当座は蠅をよける鶴　文秋
魚屋が来ると二三疋置いて行き　白水
雪舟の軸につけたる蠅の糞　ひろし
物思い蠅の行方を追つてゐる　文夫
蠅死体もうかぎつけてか蠅一疋　古方
再婚の話へ蠅がつきまとい　春巣
妻の愚痴聞き流してる蠅たゝき　水堂
蠅いない生活を還つて来て語り　葉光
蠅曰くなぜ人間は敵視する　蜂呂
恐ろしいマグロと蠅も露知らず　豆秋
臨終の顔へ無心な蠅一つ　紫香
天井の鶴へ一疋冬の蠅　三司

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）

三月二十六日　於　西光寺

須崎豆秋報

ねらい打ちしたのが今の二号なり　松庵

ねらい打ちたった一枚くじを買い　賀峯
ねらい打ち雀はもとの枝へ来る　凡九郎
囀つているのにむごいねらい打ち　豆秋
日本髪母に寝相を叱られる　伊三雄
勝名乗ゆかんだ髷のままで受け　葉光
源氏名と共に生きてる日本髪　十悟
節分と云う丸髷をひやかされ　梅里
入学式父のある子に負けまいぞ　抄児
金なんぞ〳〵と文科に入学し　香林
走る子の手を母が引く入学日　葉光
兎に角も希望に遠く入学す　太路
母が手を曳くのを嫌う入学日　黙平
ランドセルさくらの下は僕の道　水客
改札も待ちつかれたを知つており　抄児
改札を横に出てゆく旅鞄　豆秋
改札を出ると柳の小さな芽　葉平
千円の切符改札あつけなし　唯義
改札の巾一ぱいに降りるボス　恒明
大勝ののぼりへ改札から声援　白水
うすれ行く霧に大阪動き出す　松庵
毛糸玉春のリズムのまゝ動き　水客
都落ちする夜の汽車がよくはずみ　抄児
看板の上に仔犬の日向ぼこ　秀米

雑川　**玉造支部句会**（大阪市）

四月二日　清水白柳子報

宣伝車黄色い声に子供寄る　美奈美
風車子守の方がおもちやする　朝路
押合うて乗るに女の力あり　草白
水車めぐれば小さい虹が出来　章子
こりやいかんと思い乍らも横車　さかた
団体がもう始めてる春の汽車　白樺子
タクシーの今度はお客やられたか　一栄
子が起きる静かに行きやんせオートバイ　同
水煙り立てる車を傘で除け　一正
黄門記タイヤーの跡五六本　真沙魚
山羊の目に汽車は何処迄行くのやら　都詩子
宣伝車春をばらまくスピーカー　六竜子
横丁で自動車止めた律義者　雅美
くもの巣に片棒かした車井戸　同
次に乗るのが押している三輪車　白柳子
乳母車子供が押せばみぞへ寄り　同

雑川　**淀川支部句会**（大阪市）

五月十一日　於　武部香林居

武部香林報

易学者吾が運命を摑みかね　真一
恋すれば学者も只の人に見え　庚申
科学者は妻の不満に気が付かず　朝風
薄給の学者プライドだけは持ち　都詩子
学者と云ふ二字清貧に耐えに耐ゆ　六竜子
学説を尻目に株が上つて来　多久志
公聴会学者の意見聞きおかれ　野甫
もどかしく学者やたらに原語が出　花村
学問が過ぎて此の世を逃げたがり　礼三
学者陣営瓦のことでいがみ合い　香林
若草と鹿とが奈良の景にする　水堂
若草で一坪の庭生きかえり　発中
合格へ若草の色鳥の声　若葉
玄関を犬の親子に陣どられ　野甫
コワ〳〵に通れば犬の尾がうごき　若菜
春の宵犬のくさりを解いてやり　多久志

雑川　**日立櫻島支部句会**（大阪市）

四月三十日　於　日立桜島工場

丸尾潮花報

古狸眼鏡を鼻の上にかけ　沙汰男
部課長を睥睨してゐる古狸　逍二
古狸字引にされていやがられ　一舟
古狸仲居頭と言ふそぶり　潮花
岡惚れをした頃もあり子が五人　山花
岡惚れの危険もうせた歳になり　清潮
岡惚れの出から棧敷がもめはじめ　源太
肩で息するを岡惚れまだ知らず　凡十
本心が言えず岡惚れ唄にする　潮花
白い眼で見られる派手な娘を諭し　錦水
純潔を守り通して四十過ぎ　狸村
純潔をひとり守つて腹がたち　定美
どんぞこの暮しに派手な花便り　呑水
花カルタ今日は二号も宅にゐる　花代
友達が来たら持ち出す花ガルタ　花子
置炬燵雪がチラツク花ガルタ　静子
来客へ女将がぬけた花ガルタ　ひさみ
花ガルタ女は無知な口をきき　千代美

雑川　**堺支部句会**（堺市）

四月二十四日　於　摩天郎居

八木摩天郎報

倖せがまつてるようにして家出　凡九郎
家出して故郷のみかん江戸で食べ　迷舟
青春の気持保護司は知つてくれ　雄声
童謡を保護司ピアノへきつくうち　貴山
保護司にも過去あり涙そつこぶき　圭水
天職の保護司尊い職に生き　摩天郎
新調の脊広保護司へ礼に来る　武助
山間のこんな処にあるラジオ　春翠
時報だけ開いたラジオはすぐ切られ　貴山
今晩は親父の趣味で聞くラジオ　凡九郎
スイッチを誰れが切るのか寝てしまい　圭水
褒められた子は落書を消して行き　繁樹
山彦に疲れ見せない子のはしやぎ　雄声
山彦は鶯だけの声となり　貴山
恋人の名も山彦は突き返へし　摩天郎
原爆の話になつて寝ると決め　武助
原爆はもとの平和にしてしまひ　摩天郎
観光の日本原爆都市も在り　迷舟

雑川　**池田支部句会**（大阪府）

四月十二日　於　阪急四階会議室

黒川紫香報

隣まで花輪ハミ出してる表　黙平
新婚が今朝から表掃き初め　杏花
新人の舞台度胸をほめられる　夢生
一人子のシャツクリにも妻医者へ行き　昭童
しやつくりが未だ止まらない婦人会　都詩子
シャツクリが出たのでビール酌いでくれ　孤舟
かんじんな所でしやつくり出てしまい　霧笛
しやつくりが止まり駄法螺はまだ続く　六竜子
しやつくりが話の種を忘れさせ　いさむ
オール二十のようにしやつくりが出てくるよ　正斗
まじないが効かずしやつくりがやされる　三司
しやつくりがしい〳〵三ツ目の握り飯　しげお
たまに居て我が家の様のいゝ日ざし　一の字
勢よく抜けて王冠陽にころび　水客
靴磨く影はつきりと正午なり　淡舟
陽だまりにおたまじやくしの尾がこれた　鮎美

阪田謄写版

大阪市北区芝田町二五

株式会社 阪田商会

電話 福島五九九一番
五六三一～四番

溪ぬけた風が冷い丸木橋　紫香
夏の夜の話つきない橋の風　圭三
風のある橋で口笛吹いて待ち　雄声
お別れの言葉が橋の風に消え　水客
春の風橋の乞食も眠くなり　ゆずる
からつぽの財布もいれるこころへいれ　古方

川雑　**京都支部句会**（京都市）

四月十六日　於　仲源寺
大鶴喜由報

冗談を接近の手と知りながら　みてい
待呆け小型四五辺よつてくる　同
両方が入試に落ちてからの仲　烏雀
近づくと半分寝ている観光車　みてい
近づいて見ればポストのあった闇　晴芽
目に青葉新茶の宇治にあこがれて　好浪
山吹も見ず琴坂を傘に下り　紫蘭
茶の水はこゝかと宇治橋から覗く　同
戦陣を語る片手は宇治の橋　親生
白足袋で宇治を問う日の朝日焼　紫蘭
仲裁が嫌いな奴で許せない　烏雀
親達の許しが待てず家出の娘　光二郎
許すとは言えぬ立場の父であり　礫
許さねばならぬ弱味に剛れて行き　司郎
許される範囲へ患者物足らず　九角
人様の前で叱つて瞳は許し　亀一

川雑　**大聖寺支部句会**（石川県）

五月九日　於　福貞人居
野村味平報

ふし穴の日射に白うたつ埃　桃園
屋上から見れば埃の街に住み　光郎
誘惑の電話うしろに母が立ち　素百々
頼まれた電話俄に思い出し　とよ
奥さんから電話ですこゝ冷やかされ　いづみ
またあれだけは知つても出る電話　卓風
先代の好みが知れる古帽子　味平
七三に分けて帽子を持ち帰り　久雄

川雑　**下関支部句会**（下関市）

五月九日　於　下関駅
石川侃流洞報

煙草やめ酒やめ養生せよと云う　白馬
園児もう嫁に行く日の保険証　藤四郎
愛別離苦保険金では償えず　妻楊子
念仏が終るよ節が長くなり　司楼
新入社受付の娘に会釈をし　九呂平
保険医になつて病舎を建てまあし　みつ子
黒雲は低くく女将の頭痛膏　柳蛙
窓を這う雨滴れに港の灯がうるむ　戊理智
受付けで用件少し替えて云い　伊三男
これしきの家財保険に入つときは　同
サラリーはスイトホームに罪な額　一鶏
母の日に念仏姿思ひ出し　良坊
念仏の句切りをづづの音がつけ　かうたる
宝くじが当り保険屋日参し　稔坊
念仏で貧者の寄附も受取られ　士筆坊
口癖の念仏おならしても出る　十字星
太つ腹見せたあの夜の請求書の金高　蘇人
敗戦を予期せぬ保険の満期来る　陽子
突風に腰折つたまゝ麦の熟れ　ほなみ
保険金だけが遺産になる余生　半休
保険もう阿呆らし無事な日が続き　侃流洞
雨滴れのそろ〳〵腰をあげる音　同

川雑　**浜寺病院支部句会**（大阪府）

四月二十二日　膳所新三報

制帽の垢先輩のプレゼント　文糖
垢ついたまゝ案山子がもらい受け　橋村
回復期苦闘の垢を擦り合い　雅方
垢が浮く仕舞風呂にも礼を言ひ　光月
家計簿は手垢赤字は見当らず　漫多朗
療友に垢では死なんと意見され　歌扇
安静の垢の積りをほめてくれ　黒ん坊
襟垢と継ぎとが語る斗病記　やせ男
斗病の垢ふびんがる見舞客　勢園
郊外に越して花にも趣味を持ち　風鈴
床の間に野花も活けて府下に住み　漫多朗
郊外に住んで納める市民税　ATS公
郊外へ子と来て父も草を摘み　漫多朗
郊外に住む幸せな子の野球　ATS公
乳牛の声郊外の朝を告げ　文糖
郊外へ亡父に見せたい家を建て　溪泉
舗装道路市外にほしい雨あがり　喜多八
郊外へ来て雲行きが気にかゝり　金太
郊外へ来れば美味しい水の味　句浪人

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）

五月一日　於　杉本呉服店
福島鉄児報

二人目の産蕾は金ですませとき　風船
産声は男産蕾は女柄　笑泉
鉄窓へ情の産蕾入れてやり　大戸
今度こそ息子を産めと産蕾が来　明峯
田舎から孫へ産蕾と言う為替　花子
聴診器玩具にさせて脈をとり　三平
聴診器四五人診たら暇が出来　古心
聴診器女医に智性の美を添える　青山
づぶ濡れになつてもツバメ巣を急ぎ　至孝
濡れるなと思う夕立こずにすみ　好郎
春雨に濡れても行けぬ放射能　皿水
伊勢路まで子供は濡れにいた旅行　笑柳
濡れたのも混るガードの雨宿り　巷雨
ハンカチが笑うて濡れる村芝居　稲邨
副業のおかげ子供が養われ　水泡
失業へ妻の副業有がたし　紫舟
副業も悲し夜業の袋張り　野人
副業の鶏が田圃の籾を食い　牛歩
副業のつもり二号は株を買い　同
副業の闇が月給上廻り　七面山
副業を二号の入智慧から始め　笑鬼
本業で食い副業で蓄る生活　笑年
副業が身に入りだした生活向　水甫
副業の方を税吏に見付けられ　鉄児
副業の方で売れてるペンネーム　藤史郎
副業へ小さいお手々まで借られ　鉄児
嫁の分だけ副業を又増やし　文郎
白粉代程のサラリーでニュールック　一貫
白粉で目立つ噂の未亡人　風樹
お白粉も忘れて野良に生きぬく娘　奇童
すばらしい夢白粉を塗りなおし　富至
白粉で寄る年波に抗う気　巷雨
駅長の子を泣かしてる助役の子　紫陽

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食堂街
梅里の店
大萬

★大万川柳（第四十一回）を募る
兼題「学生」　路郎先生選
締切・七月十五日　句数五句以内
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

川雑 **倉敷支部句会**（倉敷市）

五月十六日　於　観竜寺　田垣方大報

和尚さんの手帖檀家が一つふえ　谷水
重役の手帖端唄も書いてあり　春日
末席の歌は手帖の一頁　呑長
先生の手帖が出たで緊張し　千種
軽犯罪やおら手帖をとり出し　一哲
寛大な処置手帖へ書いただけ　宗歩
御大は秘書の手帖のまゝ動き　方大
母さんの味見で出来る娘の料理　一善
妹が先におぼえた恋の味　香春
おハガキで味も素気もない返事　吉男
味はともかく名物だから買い　一善
実習でこんなに減つた味の素　天風
味のないたかい初物買うマダム　千種
お茶漬の味愛情をとり戻し　方大
おさしみのつまによく似た存在さ　千容
出稼ぎの子にもやりたい味に出来　晴路
味つけで持ち味までも歪められ　万古
税務署と一目でわかつたらしい顔　桂月
一目見てもらいたかつたホームラン　素身郎
一目見ただけが証拠で署へ引かれ　秀魁
一目見て押売りは売る腰をすえ　明心
一目みて暮しに負けた人と知り　谷水
よく稼ぐ妻で失業苦にもせず　一善
還暦の妻の手を引く観光地　万柳
先妻は無口後妻は喋舌り過ぎ　春日
母と妻つかい分けしてくたびれる　方大
妻だけは信じ切りたい療養所　たか代
処女までもさゝげて妻にしてくれず　香春
賢妻と呼ばれ息子に嫁が来ず　草人
知らぬ振りしてる女給へ妻が向き　晴路
年下の夫へ口紅濃ゆくなり　方大
口紅の濃さで喪服の素性知れ　谷水
ぎりぎりの生活と見えぬ紅をつけ　歌仏
退院の娘へ口紅も届けられ　同
口紅を落して母にたちかえり　聴牌
タクシーへ割勘で乗るにわか雨　天風
タクシーの音に玄関さつとあき　千代春
タクシーを呼べとは酒の機嫌なり　千容
恋人を送るタクシーふんばつし　一善
タクシーでやつと定刻間に合せ　斜木
タクシーの天井ひくき晴れ姿　同
着く前にメーターピンとはね上り　聴牌
入院へタクシーが来た裏長屋　歌仏
拘引のタクシーなのに羨まれ　万古
吉報を持ちタクシーで乗りつける　一善
雑布のような手拭腰に下げ　可笑
足跡を雑巾のないせいにする　憂国
水かえて〳〵雑巾春を拭く　星光
母の日は雑巾がけは休みます　一念
廻椅子雑巾からの立志伝　越鳥
駅長が雑巾しぼる小さい駅　万柳
令嬢に雑巾持たせた写真記者　春日
雑巾はひからび主婦は今日も留守　千容
ライバルへ顔も険しく電話切る　呑長
ライバルに勝てない夜を酒に酔い　秀魁
ライバルが同じ車でおちつけず　一哲
ライバルに見せてやりたい晴姿　彌生
ライバルの口の立つのに腹が立ち　昌月
ライバルが失業してる面白さ　越鳥
花を褒めたらライバルうつり褒め　谷水
先客はライバルだつた美容院　歌仏
寛大にされてライバル腹が立ち　たか代
ライバルに勝つた子供の頭数　草人

川雑 **宇部支部句会**（宇部市）

四月二十五日　国引半休報

藤村も川上も居る子の野球　仙柳堂
女学生先生のうぶをおかしがり　柳豊
草野球打つたボールを犬拾う　紫川
趣味娯楽野球と書いて雇われる　正夢
見送りを自動ドアーが遮つた　同
非常ハンドル所在デカ〳〵窓へ張り　青水
三振を食つたバットをぶつける　同
青雲の望をかけたピーナッツ　戊理智
終電車酔どればかり運んで来　伊三男
ホームラン球追うように皆んな立ち　雪峰
通学生校門までの単語帳　柳蛙
彌次馬が総立ちになる補回戦　峰松
古畳住めば都と蚕肥り　同
アベックの一人は電車に締出され　万盛
六三へ乗つて逃げ場を考える　雪達磨
満員車掬摸は得意の手をつかい　風来坊
花まつり電車も花を着て走り　井蛙

川雑 **大原支部句会**（岡山県）

三月二十日　於　黒住教会　本田恵二朗報

この山を越せば流れもまたかわり　弦児
お流れを頂戴しますとこびている　いく女
添乳する娘へ再婚をすゝめかね　一山
傷心を迎えてくれた流れ星　真
他人事なれば躾をはがゆがり　十坊
入智慧をしたがたゝりの恐ろしく　幹二
緩急はあれど流れに添うて無事　米花
御自慢は源氏以来の血の流れ　地久平
後悔を泣きじゃくりする脊に見せ　野川
添い遂げるつらさ二号と妥協する　恵二朗

川雑 **赤坂支部句会**（岡山県）

五月一日　於　戸川千流居　政田大介報

勘定と聞いて銚子を読み直し　佳目夫
五十年医者と不仲の誇持ち　三四詩
本心を聞くに銚子の数がふえ　兼比羅
女には惜しい勝気をもてあまし　玉露
この銚子丈けは妻が眼で知らせ　芳流
枕辺に届けられてる見舞鯛　友月
黒髪の乱れ悩し灯に背き　宇柳
軽かつた銚子へ一寸のぞいて見　笑陽
停年を女社長に使われる　雨水
墮ちてゆく女を朝の顔に見る　花蜂
初舞台夢中でしたと風を入れ　素人
女の意地立てさびしい日々に生き　土生
病人と見られ度くない髪を梳き　千流
長髪は枕の黒さ気に止めず　水呑

美人と言う誇男を尻にしき　春仙
戦争が女の誇失わせ　萃富
銚子持つ手つき前歴すぐわかり　一笑
勘定となれば銚子を数えて見　飄軒
まだ呑む気銚子の尻が叩かれる　竜仙
まだ腹に居るのに枕蚊帳を買い　冬扇
散髪屋禿げたとこへも櫛をあて　一洸
妓早やふところ工合を見た銚子　舟楽

みをつくし川柳句会（大阪市）

四月十三日　於　天王寺中学校
戸田古方報

喰べてる子泣く子笑う子子沢山　雄声
寂しさのしずむ笑へふとだまり　凡九郎
刈つても〳〵暴力団の絶えず　正斗
平凡を望むにはまだ若すぎる　同
平凡なくらし我家の丸い膳　凡九郎
つく〴〵と没句を一人よみなをし　梨花
正客へ驚く程の標準語　義宏
我も人他人も人と割り切れず　凡九郎
運は寝て待て今日も梯子酒　雄声
土を割る芽に貧しさをはげまされ　梨花
やぶへびを〳〵〳〵と笑うだけ　古方

南海電鉄川柳句会（大阪市）

三月二十九日　於　親和寮
友淵貴山報

お返事がハツキリ出来る一年生　雄声
猿智慧が買えば株の値又下り　同
猿智慧が膝を叩いた名プラン　春翠
猿智慧もちよつぴり入れて車中談　無尽
猿智慧とさとして母は出した金　貴山
放射能心配もない鰯食べ　圭水
鰯売り生きてるように誘いかけ　武助
しこたまに鰯を干して世帯なれ　のぼる

今日も又鰯か栄養学士様　武助
病弱の父へ鰯がすすめられ　摩天郎
国自慢天守閣から再建し　貴山
国自慢東京弁でまくし立て　雄声
課長きよう呂律あやしい国自慢　春翠
国自慢そんな故郷を何故か捨て　凡九郎
玄関と云う駅前のきたならし　同
駅前で煙草買う手の忙しさ　圭水
駅前が狭くも見えた花見時　一好
駅前もまた春なれや春なれや　摩天郎
駅前でもう一息の恋を待ち　無尽
あの汽車に乗れはよかつたバスが着き　春翠
駅前で聞けば分ると聞いただけ　貴山
駅前で今日の恋愛終るお茶　武助

南区医師会　杏林川柳会（大阪市）

於　岩崎一伸居
長谷川迷路報

黒髪の手前老眼とも云えず　瑞川
散歩芝居読書と老眼四つ五つ　珊枝郎
老眼になつてチヤホヤ云われ出し　一哲
そろ〳〵と眼の文句出る更年期　珊枝郎
老眼はもう行末もぼけて見え　比呂史
老眼鏡母の遺品が役に立ち　生々庵
御神籤がやはり気になる四十二　太希志
とことんはくじで決つて文句なし　迷路
うれしさにかくしきれない当りくじ　端川
くじ運の府営住宅見上げられ　生々庵
おみくじを押しいただいて凶を出し　杏子
新しい気分でくじを引き直し　同
買えそうな奴へテレビが当つて　比呂史
おみくじは大吉とあり金すられ　同
みくじには待人来るとあるけれど　阿茶
おみくじの凶を気の毒ちに出し　同
抽籤がマツチ一つでつきはなし　生々庵

当選はもう決つてた残りくじ　比呂史
税務吏へ必ず当たるくじ引かせ　珊枝郎
カラくじに又へそくりがくやむこと　路郎
道楽が白髪になつて一つ殖え　太希志
牛売つてまだやめられぬ草競馬　端川
げてものの道楽親父もてあまし　一伸
道楽な親父だつたが親だつた　珊枝郎
芸が身を助けそこねた裏長屋　生々庵
金ためる道楽のまゝ死んでゆき　同
道楽をして来た伯父も口をそえ　阿茶
道楽に習つた芸に養われ　同
道楽の出来ぬ苦境が続きすぎ　一哲
藍微塵道楽も一寸ぬけている　阿茶
道楽へ妻の涙をふと感じ　比呂史

明和川柳青蛙句会（西宮市）

五月十六日　金光呉人氏追悼句会
山本九里三報

村長の勘平も出る村芝居　紫朗
嫁姑仲よくならぶ村芝居　鶏声
書割の千両箱がゆれている　白涙
二枚目は俺だ〳〵と役でもめ　満秋
朝露に乙女健やか苺つみ　至不也
夜店から帰つた苺蚊帳へ来る　五月坊
まだ高い苺横目でチラッと見　白馬
朝苺手づくりですと隣より　水里
店先の苺に若さよみがえり　九里三
高校の野球へ苺続いてゐ　成子
摘みたての苺お世辞を云つて喰べ　酔歩
別れる日の苺の味のさびしき陽　鮎美
借金があつて近道通られず　静峰
近道の向うも急ぐ用らしい　善坊
近道が一里も近い山の肌　成子
近道をとつて走つた良い知らせ　牧人
近道の一とこ恐い辻地蔵　同
近道で今年も見つけたすみれ草　桔梗

帝化川柳会句会（大阪市）

四月十六日　於　帝国化工大阪工場
佐野白水報

花の喧嘩一升瓶が武器となり　甲子朗
一升瓶破れた惨事は花の下　華泉
とも角も一升瓶が手を打たせ　三平
人生の序曲を乗せて汽車は発ち　葉乙女
新婚の旅へ発車が待ち遠し　翠風
発車ベルもう見送りの眼がうるみ　恵撰子
目が覚めた発車のベルは次の駅　耕山
子沢山孫ですと云う顔で抱き　英治
子沢山母は箸持つ暇もなし　京一楼
発車するバスを止めてる子沢山　一朗
晴着着た子を御近所へ見せ歩き　生石
晴着だけわらわれていた新世帯　辰始
花便り晴着の欲しい愚痴を聞き　雅楽太
心中の親娘の晴着なお哀れ　乱酔
七五三の晴着袂が邪魔になり　白水

麻生路郎選評　山陽図書kk版
山陽川柳
A5版　二三七頁
定価　二〇〇円　〒　二四円
総句数二二四七句
大多数の作家は新聞柳壇から生れた。本書は山陽新聞柳壇の作家の佳吟集である。選評は本誌の主幹麻生路郎先生である。本書を熟読することによつて初心者と雖新川柳の良き作家の列に入ることが出来るように編纂されている。一読を請う。
取次御注文は
川柳雑誌社
大阪市住吉區内方代西五丁目二五

公・私・雑・記

★暑くなつた。暑くなると海を思う。この夏には鳴門観潮の会か、海を渡つて阿波のきちがい踊でも見に行きたいと思つている。★雑誌の編集しているものにとつて、いい原稿が集まるほどうれしいことはない。ドシ〳〵寄稿されたい。よい原稿ならいつでも手をうけて待つている。★堀口塊人氏から病気の見舞状をもらつた。病気を見舞つてもろうのも有難いが、それよりいい原稿がいただけたら、もつとうれしいと云つたら早速寄稿された。それが本号に発表した「石曾野先生行状記」である。味読されたい。★私が病臥した原因が、睡眠不足であり、過労であつたことから、仕事の分量を減らして今後再びバンクしないようにとの周囲からの心づかいに応えるため目下いろ〳〵思いをめぐらしている★先ずその第一策として「近作柳樽」を春巣君と共選にしたことを諒とされたい。北川春巣博士は阪大の学生時代から川柳に手を染め既に二十年の柳歴を持ち、数年前から川柳雑誌の編輯に携わつていることは今更紹介の必要もなかろう。本職は大阪市交通局病院の内科医長で、職見高邁、思想穏健でよく人を容れることの出来る点からも、「近作柳樽」の選者として最適任だと思う。私同様に御風交が願いたい。★度々既報したように、いよ〳〵本月十日には「川雑川柳まつり」が挙行されることになり、各地の支部からは、名誉の優勝楯を自分の支部に獲得しようと張り切つていると、情報しきりである。このことによつて今後新人の輩出することを大いに期待している★「川雑川柳まつり」は名こそ川雑川柳まつりではあるが、川雑関係外の作家の参加を拒否するものではなく、むしろ欣んで、来援を俟つものである。この意味から云つても各支部はこれを機会に新旧人参加の慫慂に努力されたい。★「川雑川柳まつり」の記念手拭は出来るだけいゝものを作りたいとの意嚮から、お約束の値段を無視して専門店に発注し、六月廿五日に出来る予定なので出来上り次第遠方の人達にはお届けする。句は「一ト掘りあゝ人生は和にしかず」である。この句は米不足時代の旧作ではあるが、水爆実験騒ぎや、衆院乱闘時代に平和運動の一助ともなれば、これに越した欣びはないと思う★本社の句会で、私以外に喋べる人を段々殖やすことにしている。鮎美、古方、春巣と三人出来た。それ〴〵違つた持ち味があつて面白い。六月の会で、春巣君が放射能を詠んだ句を本誌から拾つて、医者の立場から、放射能雨症について談してくれた。わざ〳〵講演を開きに行かないでも、斯うした席で、時節柄知つておきたい放射能症の知識が聞けたことはユカイである。★柳人交歓暑中広告に御協力下さつた人々の御好意をあつく御礼申上げる。

（路）

不朽同会から

▼路郎師は毎日新聞に「川柳から見たアプレ精神」を語られ、六月十七日の夕刊に所載各地から好評を博された。▼武部香林氏（大阪市）は五月十五日近鉄あやめ池に於けるステートフェア全国川柳大会の第一席に入選、友人から入選の報を聞き早速朝日新聞を手に、欣喜せられた由。▼有働芳仙氏は熊本県鮗託郡奥古閑村一四四一へ移転された▼大森風来子氏（岡山市）は五月廿九日午前八時に来洞、路郎先生と約二時間歓談の後辞去された▼蛭子省二氏（愛媛県）は五月中旬から梅雨気象に災いされ喘息と脳神経症のため日夜苦悩を続けていられると▼服部十九平氏（岡山市）は「黄鳥」六月号へ随筆「ストに想う」を執筆された▼下関鉄道病院長の阪田良坊博士は、六月三日上京虎の門共済会館で開催の日本交通災害医学総会に出席。全国参加医師八百名の議事の総会座長に推され、終了後親交の賀陽恒彦氏（旧宮殿下）邸を訪問、京都に立寄り、帰関された▼弘津柳鑒氏（下関市）からの消息に依れば五月上旬以来専売公社下関支局より労組広島支部大会、引続き監視課長会議十七日山口県で県下ブロック課長会議、新潟の全専売労働組合全国大会に参加、萩広島会議にも来加多忙の由。▼山田季贅氏（広島県）は今回広島県安佐郡可部局内亀山村中大毛寺公営住宅第四号へ転居。▼中島生々庵博士等の南画同好会では京都東山妙法院で開催された文人展を観に大阪から貸切バスで六月六日午前九時、路郎師を招待され京都行を挙行、一行三十数名中には柳人で同展へ出品の中島生々庵夫妻、長谷川迷路博士、河村瑞川博士等が世話人として参会、妙法院で文人連盟の書、文人画、篆刻並びに特別出品を鑑賞、次いで宇治市の黄檗山万福寺へ廻遊、同好会指導木村杏園画伯が最近揮毫完成された同寺の襖絵「松壑遐齢図」を拝観し、普茶料理で歓をつくし帰阪された▼福島鉄児氏（岡山県）からの消息に依れば、六月二十日弓削平、七面山、笑泉、奇童の四氏と共に、愛生園に川柳慰問されたとのこと▼長野晴浜氏（兵庫県）より同氏近詠短歌「銀杏の風」玉橋教首本社に寄せられた。▼吉田水車氏（宿施市）は四月二十日より名古屋市に滞在、一ヶ月半振りに六月二日帰阪せられた。▼清水白柳子（大阪市）は大阪都新聞、錦城新聞川柳欄に、御奮闘の様子、欣びに堪えない。▼小西無鬼氏（兵庫県）は六月四日用務の為鳥取県へ出張、浜村温泉より「旅愁とや酔ひ痴れてみても温湯の宿の」の句信を寄せられた。▼松江梅里氏（大阪市）の経営、アベノ橋近畿地下映画食通街の大万が六月十五日から新装成り江戸前にぎりずしと季節一品料理で開店▼常任理事会が六月二日夜、中島小児科診療院楼上で開かれ、川雑川柳まつりに就て協議並びに、路郎先生、生々庵理事長推薦の役員改選の発表があつた。（副理事長）西尾栗氏、（常任理事）黒川紫香氏、富岡淡舟氏、松江梅里氏、なお上田翠光氏、水谷鮎美氏、須崎豆秋氏は身辺多忙のため理事へ、その他の役員は重任。▼中村ただみ氏は家庭の事情により六月限り退会された。▼鈴木九坡氏は会規により除名。

（摩）

小児科
内科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

川柳不朽洞會

指導
麻生路郎　奥村丹路　戸倉普天　石井白面人　亀山晴峯　家本富至　木村千容　後藤梅志　小池しげお

賛助
池沢白翁　木村孤浪　尾崎方正　種　瓜　平　服部十九平　那谷光郎　竹内圭三
長谷川一徹　戸田古方　桜川不水　渡辺孫拙　大森娯句楽　野村味平　松村蔦古
長野晴浜　水谷鮎美　浜田久米雄　福島正則　長谷川三司　木村水堂　藤井春日
藤村　作　西尾　栞　好崎申仙　富岡淡舟　山中志乃布　膳所新三　平尾太希志
中田守雄　市場没食子　菊沢小松園　飯降白香　桑原養痴園　楠田英子　海野比呂志
白川明吉　逸見灯竿　西辻竹青　成瀬月仙　八木摩天郎　木口賀峰

―維持會員―

中村祐吉　福田山雨楼　清水白柳子　長野井蛙　若林草右　福田丁路　岡本緑風子
高安六郎　寺井鋭々　夷　一笑　林野雖光　足立春雄　水谷谷水　津田麦太楼
藤村雅光　前山北海　小川恒明　阿万万的　有働芳仙　椙原一善　小西雄々
田中辰二　古川魔花麗　浪　玲之介　間島青丹子　大西迷窓　田村藤波　浜野奇童
岩崎愛二　内藤草一郎　徳永雅美　上田春柳　延永忠美　岡田夜潮　橋本峰春

洞友
鳥山一歩　大坂形水　大森風来子　森下愛諭　浜畑胡蝶　坂井三葉　高崎雄声　橋本幸男
三輪晩翠　武部香林　友淵貴山　地倶山風楼　中谷仙坊
亀井花童子　井上湧三　木下幽王　岸　南柳　坂田良坊　臼井三林坊　森　文失
田村孝之介　宮田不二　福田妄夢　松江梅里　石川侃流洞　岡村牛耕　吾郷玲人
山本雨迷　西垣錦風　新川博也　丸山弓削平　吉形苑女　稲葉鳩花　岡田青果
安川久留美　川村好郎　尼　緑之助　直原七面山　安岡珊枝郎　下山清潮　若本多久志
山路閑古　築山快夢起　水谷竹荘　黒田笑泉　長谷川迷路　本田恵二朗　高橋操子
前田伍健　高田抱逸　小橋隆如　石岡正司　南　捨舟　真鍋一飄　谷野花峰
柴谷宰二郎　小田沙兆　弘津柳慶　西森花村　黒木弾正　松川杜的　古谷馬洗
蛭子省二　市岡暁舟　吉田圭井堂　河村日満　牟田一哲　馬場夢生
麻生葭乃　三鴨美笑　杉谷湖山　田代尋四　河村瑞川　光好三四詩
橋本緑雨　白砂旋風　増田耕民　黄瀬美秋　木村無名林　永田六竜子　森川東南
高鷲亜鈍　藤本満年　国弘半休　西口如川　田中鳥耕　村上ゆづる　小原宇柳
沢田四郎作　佐野卜占　姫田夕鐘　藤原虚水　井野格一

―正會員―

東野大八　吉田水車　小沢史葉　福島鉄児　益永貞女　臼井呑風
大西八歩　小西無鬼　藤本茶々　大倉四案　日置文郷
川村花菱　須崎豆秋　大鶴喜由谷　内一草　山田季賛　中島兎庵
石曾根民郎　吉田斜水　塩浜一路　山田鳥荘　佐野白水
中島生々庵　正本水客　山口秋花　福本翩骨　水本無尽　尾野おさむ

不朽洞会員
―特別會員―

募集

課題吟募集

嫂（廿句）川村好郎選
日給（廿句）国弘半休選　（七月二十日締切）
病床（廿句）中島生々庵選
都会（廿句）藤本満年選　（八月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選　北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）　（毎月廿日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雅吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第九卷　第七号
定価　四〇円（送料四円）
半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円
（禁轉載）
昭和廿九年六月廿五日印刷
昭和廿九年七月一日発行
大阪市住吉島區内芳代四五丁目二五番地
編輯兼発行人　麻生幸一郎
印刷人
大阪市住吉島區内芳代四五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪　七五〇五〇

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和廿九年六月五日印刷納本・昭和廿九年七月一日發行

THE SENRYU ZASSHI

NO・326

Published monthly by Senryu Zasshisha. Osaka, Japan.

胃潰瘍
胃痛・胃酸過多
十二指腸潰瘍
予防・治療
ファイナリン
潰瘍を促進させる胃液酸度を低下させ、同種剤中副作用がいちばん少く、価格も低廉な新原因療法剤です。予防にもよい。
山之内

大阪名菓
ながら民かまど
浪民と日本一

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話 ㊥三四〇九

若き日の夢は緑の夢…緑の島へ
国立公園
友ヶ島
7月1日から 9月10日まで
予約受付中
バンガロー・テント・なぎさの家
サンマーハウス・学校團体宿泊所
割引乗車船券 なんば から 往復 400円
お問合せ お申込は 南海交通社へ
なんば TEL ㊥ 2931・梅田新道 TEL ㊥ 5019
和歌山 TEL 2321
加太駅下車
バス連絡あり
南海電車

円四料送 圓拾四價定　誌雜柳川　號六二三第